
ユユラングの春の月に安眠を

上月茉莉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ユウラングの春の月に安眠を

【Nコード】

N3090W

【作者名】

上月茉莉

【あらすじ】

セオが幽閉されて10年を迎えた頃。幽霊の少女がセオの前に現れた日、それまでの生活が一変した。
「革命って言葉、知っているか？」

ブローグ

「え……？」

視界に飛び込んできたのは、濃厚で鮮烈な赤色だった。ぽたぽたと、どこから床に液体が滴り落ちていく音がする。正確には血液だ。血が壁に飛び散っていて、独特の臭いが地下室に充満していた。こんなむせ返りそうになるほどにキツイ臭い、自分は知らない。

次に目に飛び込んできたのは、左胸に長剣が突き立てられ、力尽きて床に倒れている兄だった。その兄の服や体は、吐き気がするほど真っ赤に染まっている。なにか言いたげな兄の口からは、何も発せられることはない。その目は犯人だけをとらえていて、裏切られた思いを光のない目で訴えているようだった。

兄のそんな表情は初めて見た。驚きのあまり、目をそらしてしまう。目をそらした先に、人がいた。

そこに立っていたのは、動かなくなっていた兄を見下ろして興奮している父親だったのだ。顔面に返り血を浴びていて、兄が力尽きたさまを見て歓喜している。青い瞳だけが浮かび上がっていたことが余計に恐怖を煽った。

「父上……？」

ようやく口から音が出た。掠れてはいたが、確かに音だった。

父は唇を笑いの形に歪めてこう言ってきた。

「……さあテッド、お前も死ぬんだ」

プロローグ（後書き）

お目通し有り難うございました。

1話 「今の見たか？」（1）

1

目が覚めてしまった。ぼーっとする意識の中で、二度寝をするべくセオはもう一度毛布を被り直す。どうせ今日もすることなんてないのだ。自分は幽閉されているのだから。

この塔に幽閉されて十年を迎えた。曜日感覚も、季節のうつろいも次第に自分には関係なくなっていた。ゆっくりと、けれど確実におかしくなっていくのが分かる。

特に、19回目の誕生日を迎えた日から幽霊が見えるようになったことはどう考えてもおかしかった。

ついに狂ったか、とは思ったが驚きはしなかった。驚きこそしなかったが、アニーやアレックスに見えないとは知らず行動してしまったことが何度もあり、ついこないだ心の心配をされてしまったばかりだった。それからはいかに彼らをやり過ごすかということだけを意識した。無視をしまえば問題ないと思ったからだ。それでも斧を頭に生やしている男はお喋りこの上ないし、全裸の少女には足が一本なく無くした足を探してセオに泣きついてきたりしてきたが。

彼ら 幽霊と時間を共にするようになって気が付いたことが二つある。

一つは、幽霊達は皆セオの話には耳を貸さず自分の話ばかりしてくるということ。2つ目は幽霊は決まって銀髪赤目をしているということだ。

初めこそ彼らの存在は単調な幽閉生活にはいいスパイスになったけれど、意思疎通ができないと分かると、たったの一週間で雑音にしか思えなくなってしまった。

「若様、起きて下さい！」

ほらまた幽霊が喚いている。

無視しかけてはつと目を開く。聞き覚えのある女性の声は生身の人間のものだったから。自分の世話を見てくれている女性、アニー・ノレのものだ。目を開くと、彼女の青い瞳とぼちり目が合ってしまった。

「お早うございます」

メイド服の女性　アニーは軽く頭を下げる。

伏し目がちで憂鬱そうな青い瞳。長く癖のない金髪。毎日見ている顔を前にしたおかげで、次第に意識も思考回路もはつきりしていく。

アニーは挨拶してきたものの、それだけだった。なにか言ってくるわけでもない。二人の間に広がっていたのは挨拶を返さなくてはならないような、沈黙。それだけだった。

「……………お早う」

どこか慎重に挨拶を返した。

そして起こされた時に真っ先に抱いた疑問を、アニーに尋ねた。

「お前が僕を起こすなんて珍しいな。なんかあったか？」

セオが覚えている限り、10年の幽閉生活中にアニーが起こしに来たことなど数える程度しかない。起こしに来た時だってアニーが仕えることに不慣れだった10年前の話だ。

何か大切な用があるんじゃないか？

直感がそう告げていた。洗濯したいから今着ているローブを脱いでくれ、とか。朝食をもう作ってしまったから食べろ、とか。

しかしアニーの唇から次がれた言葉は、いずれにも当て嵌まらなかった。

「アレックスが、今日は若様を外に連れていきたいと言っているのです」

何を言われているのか分からず頷けなかった。毛布を引き寄せながらじつくりと頭の中でもう一度繰り返し返す。

どうやらアレックスというアニーの弟でもある唯一の友人が、セオを外に連れていきたいと言っているらしい。

「……………は？」

信じられなくて思わず聞き返す。

アレックスにもアニーにも、セオを勝手に連れ出す権限などないはずだ。それどころか、そんな真似が領主である父親の耳に入ったら、姉弟もろとも首をはねられるに決まっている。なのにアニーは、なんてことないように言ってきたのだ。

もし、もしもアニーの言葉が本当なら、したいことがたくさんあった。10年ぶりに川ではしゃいでみたいが、10年も一緒だった二人の従者を失うような真似はしたくない。川遊びと従者の命とを天秤にかけたら、当然従者の命の方に傾く。

何も喋らず、寝癖のついた髪すら気にせず固まっていると、

アニーの顔がどんどん暗くなっていつてしまった。

「外、行きたくありませんか……………？」

説明不足だ。額く額かない以前に情報が足りない。それでも長い睫毛を震わせながら言われると返事に窮してしまう。嫌だなんて真っ向から言えなくなってしまったので、答えを出すことを引き延ばすことにした。

「嫌とかじゃなくて……………えええ。なんだつまり、それは父上が許可したのか？」

声が掠れていた。朝だからとかではないだろう。

父上と呼ぶ時だけセオの声が低くなったことに、アニーは俯くだけだった。そしてセオの部屋に誰もいないというのに いや、部屋の隅に餓死したのか異様に痩せこけた銀毛の猫がいるが 内緒話でもしてくるかのように声を潜めて告げてくる。

「アレックスの独断です。アレックスは若様に気分転換してほしいんです」

ゆっくりと言葉を紡いでくる。アニーの青い瞳からは何の感情も読み取れなかった。

「き、気分転換……？」

セオが口の中で繰り返すと、アニーが頷いた。

「はい、本来なら若様は侯爵家の方。このような場所に捕らえられ、表向きは死んだとされ、自分のような身分の者しか友人が居らず日々を過ごされて……このまま心を患われてしまふのが弟は嫌なのです」

そこまで一息に喋ると、すうと息継ぎを行い再び喋り始める。

二人に気を遣わせてしまうなんて。

「少しでも若様に気分転換をしてもらいたいです。些細で短い外出ですが……若様、駄目でしょうか」

最後まで言い終えるとアニーはこちらの表情を窺う。弟の気持ちを十分理解した上での言葉なのだ。アニーの瞳の奥の光には真剣な輝きを感じられた。

「い、いや……。短時間でも外に出れるなら、それ以上嬉しいことはない。ただどお前達が危険な橋を渡る必要は……」

自然と熱が入る。膝上に毛布をかけたままという姿勢は、客観的に見ると不似合いな物があつたが、客観的に見れなかったセオにはそこまで考える余裕がなかった。

アニーは顎を引き小さく頷いてみせる。

「いいんです、私達は」

返ってきた返事はセオが予想していたよりも簡単なものだった。

やはり話が噛み合っていない気もするが、その分覚悟を見せ付けられた気がした。

口の中が渴いている気がして、ごくりと唾を飲み簡単に喉を潤す。
「……そもそもアニーが僕に言う話じゃないだろう。アレックスを出してくれ！」

話を聞く限り、アニーよりもアレックスと話をした方がいいように思える。混乱していたがその程度のことは分かった。

しかしアニーは、長い金髪を揺らして否定する。今日はメイドキヤップではなく、ヘッドドレスのようだ。

「アレックスは今塔におりません。鍵を取りに、北部の城にまで出向いております」

「……僕の意志云々じゃなくて決定事項じゃないか、それ」

一気に力が抜けた気がする。

城という単語に呆れてしまいセオは溜め息をついた。

鍵というのは、セオの足首に囚人にするように纏わり付いている足枷の鍵のことだろう。この足枷は塔の地下室を自由に歩ける程度に鎖の長さに余裕があるが、塔の階段を登るだけの長さはない。セオが階段に近付くと鎖が引っ張られ、それを合図に足首に無数の針が突き刺さる仕掛けになっている。

悪趣味極まりない父親が10歳の誕生日にくれた悪趣味極まりない誕生日プレゼントだった。何度これに泣かされたか分からない。その鍵を用意してくるというのは、セオが外出を嫌がろうが関係ないということではないか。

考えてはつとした。自分は大切なことを忘れていた。アニーを見つめ口早に言う。

「待て、鍵なんてアレックスが用意出来るわけないだろう」

なぜ今更そのようなことを聞くのかと、どこか不思議そうに首を傾げてアニーは口を開く。

「いいえ、若様。これはアレックス一人の判断ではなく、奥様の協力もあるのです。ですから、若様は何も気にされなくていいんですよ」

「は、母上が……？」

気にするな、と言われても気にしてしまうのだが、母親の名前が上がったことで口をつぐみ考え込む。

慎重なあの母親が関わっているということは、安全性だって十分確保されているということなのだろう。

だったら迷うことはないのではないか……？

説明は全て終わったとばかりに、アニーが姿勢をまっすぐに正した。枕元に置いてある水差しになにも入っていないことに気がつき、

当たり前のようにそれを下げ 改めてセオに視線を向ける。

「私からの話は以上です。若様、お気持ちを聞かせ願えませんか？」

どこか覚悟めいた様子で目を細め尋ねてくる。口内が渴いて仕方なかったが、そんなことも気にならなくなる程強く、強く頷いた。

「……行く！ 行くに決まってるだろう！」

それを聞いたアニーが、珍しく嬉しそうに笑み、静かに頷いてくれた。

1話 「今の見たか？」 (1) (後書き)

お目通し有り難うございました。

(2)

2

外出を決意したセオはそれから用意に没頭した。用意といっても顔を洗ったり朝食を取ったりといった程度のものなのだが。

朝食を食べ終え、物入りの時はとアニーが渡してきた金貨の入った布袋を受け取ると、通気孔の向こうから馬の嘶ぎが聞こえてきた。アレックスが到着したのだとすぐに理解できた。勢いよく顔を上げ、興奮した声で話しかける

「アニー！ これ、アレックスだと思うか？」

アニーはセオを見ながら、反対に淡々とした口ぶりで返してくる。「アレックス以外、馬車で来た者はないではありませんか」

「……。ま、まあそうだね、うん」

淡々としていたからか、逆に気持ちが悪く落ちてしまった。確かに、この塔にアレックスと両親以外の存在が訪れたことはない。父親は来たといっても一度だけ、それも目が合っただけで、会話などしていないのだが。

「では、私は少し上に行ってきます。暫くお待ち下さいまし」

頭を下げ階段に向かって歩いていく後ろ姿を見送った。本当はセオもアニーと一緒に行きたいのだが、そうすると足枷に噛み付かれてしまい外出どころではなくなるので断念する。慌てなくともすぐ上にあがれるのだと自分に言い聞かせた。

ベッドに腰を下ろしながら、何とは無しに地下室を見渡す。僅かな生活必需品、暇潰しに描いた絵、散らかったままのランプ、棚一杯に詰められた羊皮紙の写本、誇りを失わないようにと壁に掲げられた家紋。これらが置かれた地下室がやけに広く感じた。

そして部屋の隅には先程と同じように、痩せこけた銀毛の猫の霊がいた。建設中の塔に迷い込んで出られなくなったのだろうか。そ

れとも、この猫も捕らえられていたのだろうか。

自分で考えておいて馬鹿な考えだと自嘲する。猫が幽閉されるわけじゃないじゃないか。

セオの視線に気がついた猫の霊が弱々しくこちらに視線を向ける。見たことのない顔だった。セオが知る限り霊というのは壁をすり抜けて自由に動いて回れるので、この猫は暖を求めて地下室に移住してきたのかもしれない。霊に暖を求める感情があるのかは不明だが、初夏だろうとユウラングの朝は冷えるのだ。死んでいようが地下室のが居心地は良いのかもしれない。

ミヤア、と猫がか細い声を上げる。それはセオに餌を求めているように見えて苦笑いを漏らす。

「すまない、餌はあげられないんだ」

肩を竦めて謝ると、恨めしそうに低くミヤアと鳴いて姿を消してしまった。その様子に違和感を覚えるが、違和感の正体は分からず終いだ。もう一度肩を竦める。

その時、階段の方から二人分の靴音が聞こえてくるのが分かった。猫のことなど忘れてしまった。アレックスとアニーに違いないと思ったから。

「姉さん姉さん、どこに行ったらいいと思う？」

聞き慣れた少年の声が聞こえてくる。ぱあと顔を明るくさせた。

「人が多い所は避けた方がいいと思うけど……」

「姉さんって真面目すぎるって言われたことない？」

どうやら外出先の打ち合わせ中らしい。地下室の声というのは本人が思っている以上に反響するのだ。それにしても重要なことを本人抜きで決めていないか。

「アレックス、アニー！」

階段を下りきった二人に真っ先に声をかけた。17ほどの少年がセオの方に顔を向けてくる。しっかりとした革細工のブーツに、鍰のついた帽子。赤いジャケットはしっかりとした作りで、ローブだけの自分よりマシな服装をしていた。

アニーは新しい水差しをベッドの横の台に置いてから頭を下げ顔を上げることなく俯く。

「若様！ お早うございます、アレックスです」

金髪の少年が真剣な表情で告げてくる。本人は真面目に不可解なことをしているのだからおかしくなった。

「名乗らなくても知ってるよ」

肩を揺らして笑う。己の失態に気が付いたアレックスも照れをこまかすように笑っていた。

アレックスはズボンのポケットから宝石箱を取り出して蓋を開ける。ちらりと視線を向けると、宝石箱にはきちんとした細工が施されており、中には鍵が入っていた。

あの父親は息子の足枷の鍵をいかにも高価な箱にしまつて保管しているのか。へどが出そうだ。

「若様、姉さんから聞いているとは思いますが……外出は一時的なもので、特例ですからね。気分転換程度で、これつきりなんです。どうかご理解を」

念を押される。普段のアレックスはこう細かくなく、もっと脳天気なので、それくらい

強く言われてきたのだと分かってしまった。

「ああ、……理解しているさ」

セオが頷くと、床に投げ捨てられたトランプを呆れたように一瞥してから、アレックスは身を屈めてセオの足元にひざまずく。

足枷に触れ、錠前を探す。もはや身体の一部とも呼べる足枷が触られるのは、ほんの少しだけ複雑だった。錠前を見付けたアレックスは、ゆっくりと鍵を差し込んでいく。鍵を捻ると、カチャリという音が地下室に響いた。

足首に絡み付いた足枷を引き抜いたアレックスの表情が、苦虫を噛み潰したように歪められる。

「あ……痛そ……」

その視線の先には、足枷によって生まれた怪我があるはずだ。と

うの昔に傷は癒えているのでなんてことはないのだが、見る人が見れば生々しく映るようだ。

「若様、足どんな感じですか？」

足枷を外し終わったアレックスが尋ねてくる。ゆっくりと太股を持ち上げてみると、すんなりと足を動かせた。冗談抜きに羽が生えたようだ。足とはこうも軽やかに動かせるものだなんて、今まですっかり忘れていた。

「解放された囚人みたいな感じだよ」

自嘲混じりに返すと、返事に窮したアレックスが苦笑いを浮かべていた。

自由になったセオが足の軽さを堪能していると、それまで黙っていたアニーが足を一歩進ませる。いつの間にか胸に抱えていた黒色のジャケットとズボン、手袋を差し出してくる。

「着替えて頂けますか？」

抑揚のい声の内容にセオは目を丸めてしまった。そこまでしなくてはいけないとは思っていなかった。

用意された着替えを見ると、簡素ながらも質のいい生地を使っていた。どこで調達してきたのだろうと不思議に思い面を上げると、察したアニーが補足するように付け加える。

「奥様からです。仮にも貴族なのだから身なりは整えろ、とのことですよ」

視線を落として着替えをよく見る。母からの気持ちは嬉しかったが、現在着用しているローブでは駄目なのだろうか。これだって修道院のものであるはずだ。頭からすっぽりと被れるので、足枷のせいでズボンが履けないセオには適していたのだ。

複雑だ。裾なんかのデザインはしっかりしていると言うのに。

「……有り難う」

複雑ではあるが礼を述べて着替えを受け取る。アニーが居ることも気にせずその場でローブを脱ぎ捨てた。

アニーは視線を床に落とし、散らばったトランプを見つめていた。

セ

オが着替えている最中、身を屈めてトランプを片付けているアニーの姿があった。

「若様、手伝いましょうか？」

手持ち無沙汰になったアレックスが尋ねてきたが、残念なことに着替えは大方済ませてしまった。後はジャケットを羽織り、手袋を付けるだけである。

「平気だ。それにそういう事はもっと早く言ってくれ」

言われても一人で着替えられるので断るが。

膝を覆い隠すほど丈の長いジャケットを羽織りながら返した。丈が長いのは最近の社交界では流行なのだと、何年か前に母親から聞いたことがある。流行が鉄板になったとはいやがおうでも時代を感じてしまう。

「あ、すみません。……若様って濃い色が似合いますね、格好いいですよ。いいなあ」

「……有り難う」

それはつまり白いローブが似合っていなかったと言っているのだろうが。

セオが疑いに満ちた視線を向けると、アレックスは気にした様子もなく自分の服をつまらなさそうに眺めていた。そして顔を上げこちらを見つめて問い掛けてくる。アニーと同じ綺麗な青い瞳だ。

「そうそう若様、どちらに行きたいですか？」

川、と即答したかったがこうもしつかりとした服を着ているとなると、川遊びは避けた方が良くかもしれない。非常に残念だが仕方ない。

「ん、そうだね、人の多いところに行きたい。今日は祭りはやっけないのか？」

セオの言葉を聞き、トランプの札を整えていたアニーがこちらを向いて短く口を動かす。

「やっておりません。夏至祭は先日終わりましたし。それに、人の

多いところは」

「あー！ 姉さんは固いな！ 今日くらいは若様の行きたいところに行こうって。半日もいるわけじゃないんだし、若様だって十分理解されているさ」

アニーの小言を遮るようにアレックスが声を張り上げ、話を切り上げようとセオの腕を引つ張り階段へと足を進める。どのように反応していいか分からず、アレックスのしてやったとばかりの顔と、アニーの険しい顔とを交互に眺めアニーに軽く頭を下げてから階段を上っていく。

階段とはどのように登るものだったか。すっかり忘れていたのだが、体は覚えているようで簡単に足を進められる。それでも筋力が衰えているからかどうしてもふらついてしまったが。支えの代わりに前に出たアレックスの背中を服だけ摘む。

「アレックス……！ 若様、塔を出る前までに行き先を考えておいてくださいね！」

カツンカツン、と響く靴音を遮るように背後からアニーの声が聞こえてくる。空いている方の手を持ち上げひらひらと翻し返事をした。

「……なあ、アレックス」

前を歩くアレックスの裾を握り締めながら、先程までの浮かれた声を一転させて、真剣な声で名前を呼ぶ。

服が伸びようが関係ないといったアレックスが顔だけ振り返った。

「はい、どうかされました？」

(2) (後書き)

有り難うございます。

(3)

3

「本当に、本当にいいのか？ お前達に危険はないのか？」

足枷を外しているので今更かもしれないが尋ねる。語尾が僅かに震えていたのは気のせいではない。

いつになく弱気なセオの言葉にアレックスは口を閉ざしてしまう。少し考えているようだった。もう少しで階段を登りきるというのにやけに長く感じられた。

「旦那様にばれたら少なくとも爪の5枚は剥がされますかね。ただど構いませんよ」

爽やかな笑みを浮かべながら恐ろしいことを言われた。セオを安心させたいのかもしれないが、逆効果でしかなかった。それに少なくとも爪が5枚犠牲になるのなら、最高ではどのような処罰が与えられるというのだろうか。考えたくない。

素直に喜べなくて口ごもる。とは言え、どう転ぶことになるうが礼だけは言わないといけない気がした。

「……有り難う」

小さな声で呟くと同時に、ようやく階段を抜けられた。大分体力を消耗したらしく、知らない内に息が上がっていた。太股も痛んでいるのだが、これは秘密にしておこう。

「へへっ、光栄です！」

セオの言葉を聞いて反応に困ったようにはにかむと、少し気取ったように頭を下げていた。

幽閉生活の弊害を主に足に感じながら、セオは10年ぶりに見る異なる風景に胸を躍らせた。

広間はアニーの生活スペースのようだった。アニーの清楚な外見に反して雑多としている。脱いだ服をベッドに投げ捨てられている

辺りがそうだ。従者の新しい一面を垣間見たようで嬉しくなってしまった。

「アニーとお前って、やっぱり姉弟だな」

含みを持たせて言うを見るからにアレックスが動揺した。

「なっ、それどういう意味ですか!？」

心外だとばかりに反論してくる。どうも散らかった部屋の主を姉と見做したくないようで、その反論っぷりにセオは声を立てて笑っていた。

「はははっ、そう怒るなよ」

足枷が外れるだけでこんなにも開放的な気持ちになるとは思わなかった。声を立てて笑ったまま、セオはアニーのベッドに腰を下ろす。地下室でセオが使用しているものと同じ造りなのだが、人のベッドに無断で座るなんて本当に久しぶりだ。なんだか笑いが止まらなかった。

アレックスが仕方のない物を見るように目を細めて、心から嬉しそうに笑う。

「……良かったです」

アレックスは満足そうに告げたのだが、ベッドで遊んでいたセオにはよく聞こえなかった。うまく聞こえなかったため、喋っていた程度の認識しかない。セオは不思議そうに瞳を丸める。

「ん、なんだって？」

尋ねるとアレックスは即座に首を横に振る。なにか言ったのは分かっているのだが、アレックスに言う気がないらしい。

「あ、そうだ若様、シールド飲みます？」

シールドとは林檎で造られた果実酒だ。ユウラングでは水は貴重なため、飲料水は度数の低い果実酒で代用するのが普通だった。

しかし見事に話を変えられた。感心してしまうほど見事だった。

「……。ああ、頼んでいいかい」

はい、とアレックスは快諾し部屋の隅に置かれている樽の方へ向

かう。セオが呆れていたただなんてこれっぽっちも考えていなさそう
だ。

こなれた手つきで樽の中の液体をグラスに移し替えているアレッ
クスを見ていると、階段からアニーの姿が覗くのが見えた。

アニーは白く細い腕にシーツと毛布、セオが床に放置していたロ
ーブを抱えていた。重たそう、というよりは視界が窮屈そうだった
ので、手伝おうと立ち上がると、アニーの視線が向けられる。

「若様、人のベッドに居るのは行儀が悪いと思いますが……」

アニーの言う通りであつたので、セオは苦笑いを浮かべる。

「ごめん」

素直に謝罪の言葉を口にし、アニーの傍に近寄り抱えていたロー
ブと毛布とを持ち上げた。シーツしか持たなくなつたため視界が開
けたアニーが、驚きに目を大きくして申し訳なさそうに呟いた。

「あつ……有り難う、ございます」

「お礼だよ。どこに置けばいい？」

返事を促すように視線を下げると、アニーが反応に困っているよ
うだった。主筋の人間に向かってどう言うか考えているのかもしれ
ない。

「……あちらの桶に入れて頂けますでしょうか」

軽くなつたとはいえ両手は塞がっているため、アニーは視線と顎
とを窓際に置いてある桶の方へと遠慮がちに向けた。

セオが頷く前に、シードルを二つ目のグラスに注いでいたアレッ
クスが声を上げる。

「姉さんー。シードル飲む？」

「ううん」

視界の端に、首を横に振るアニーの姿が見えた。その間にセオは
指定された桶に毛布とローブを静かに入れる。

「あ、若様、どうぞ」

いつの間にかアレックスが窓際に近寄っていて、シードルの注が
れたグラスをセオに差し出してきていた。

「どうも」

グラスを受け取り礼を述べる。

セオとアレックスだけがシールドを煽った。地下室の水差しに入っているシールドと変わりはないはずなのに、どうしてこんなに美味しく感じられるのだろう。上品な果実酒の味わいに、思わず笑みが零れた。

「若様、行き先は決められましたか？」

シールドを舌の上で転がしいつも以上に堪能していると、アニーが声をかけてくる。顔を上げてアニーを見つめるがなにも言えなかった。先程から候補地が泡のように浮かんでは消えていくからだ。

困ったように眉を下げ、返事をする。

「いや、早く決めなくちゃって分かってるんだけどさ、いざってなるとなかなか決まらないんだよな。……あ、許されるなら市場に行ってみたいけど、どうだろう？」

後半は言い難くて発音悪いばそぼとしたものになってしまった。それでも二人にはちゃんと聞こえたようで、アレックスの帽子の下の表情が複雑そうに顰められる。思うことはあるがためらいが生じているようだった。何かまずかっただろうか。不安になってしまう。アレックスの様子に気付いていないのかアニーがおずおずといった調子で賛成してくる。

「市場なら私も行きたいです。ただ、若様……」

一度言葉を区切り、こちらの様子を窺うように視線を持ち上げる。何が言いたいのか全く分からず、セオは首を傾げていた。

「ん？」

「市場も大分変わりましたので、ご期待に沿えるかは分かりませんよ……？」

残り一口となったシールドを口の中に含みながら、頷こうとする。と今まで黙っていたアレックスが意を決したように声を上げる。

「姉さん、市場は駄目だよ」

突然声を張り上げられびくりと肩がひくついてしまった。アニー

は唇を僅かに尖らせながら、何の話だとばかりに弟に視線を向ける。
「人が集まるところに従者を侍らせたよくわかんない男が現れてみるよ。旦那様の耳にも入るだろうし、若様だつて気付く人もいるかもしれないじゃないか」

アレックスがアニーに告げる。よくわからないかは別として、言われてみれば確かにと納得出来るものだったが、それは同時に今までの計画を泡に帰すような発言だった。

市場が却下ならどこへ行こうか セオは溜息をついて思考を巡らせる。

「だから、市場は止めた方が良いんじゃないかなー、とか……とか！」

重たい溜息をつくセオに一瞬だけ視線を向け、申し訳なさそうに続けている。セオに向かって、というよりも自分を納得させるような口調だった。

「……まあ、仕方ないか」

いつそ領内を見て回るだけにするか……？

そんな考えが頭を過ぎった時、セオの考えを打ち消すようにアニーの声が広間に響いた。

「アレックス、別に大丈夫じゃないかしら？ 9歳で死んだつてなつてるんだし、19歳の若様が市場にいたつて誰も気付かないと思うの。南部だつたら尚更よ。それに、貴方はまだ城に来ていなかったから知らないでしょうけど、若様は公の場所になかなか出なかったもの。奥様に言われたのは分かるけど、少し神経使いすぎよ」

アレックスは自分の知らない情報を出されたために何も言えなくなつてしまったようだった。アニーが提案した考えが一番無難だと思つたらしく頷いていた。

あの頃引つ込み思案だったのは確かだしよく兄の後ろに隠れていたが、覚えているなんて使用人達の間でよっぽど話題になつていたのだろうか。セオは苦笑を漏らした。

「……姉さんを信じる、けど……」

頷いては見せたもののまだ完全には納得していないようだ。申し訳ない反面、喜びの気持ちの方が勝っているのが正直なところだ。それにしても南部に市場などあっただろうか。首を捻っていると思い出したようにアレックスが説明してくれた。

「あ、南部市場は数年前に出来たんです。南部はアキネス領とも隣接しているのは覚えていますか？　だからアキネス領の人々も利用していますし、見ない顔がいても不審に思われないんですよ。……じゃ、南部市場に行くということでもいいですか？」

初めて聞くことに一回一回感心して頷いていると、最後に確認をとられる。

南部市場だろうが北部市場だろうが人を感じられる場所にいけるなら、なんてことない違いに思えた。それに最近出来た市場だということも、なにがどう様変わりしたのかも興味を引かれる。

南部市場に行きたい。

セオの中でその気持ちが強くなっていた。

「ああ、ぜひお願いするよ。迷惑をかけてすまないな、本当有り難う」

「気にしないで下さい。若様が喜んでくれるのが、俺達が一番嬉しいんですから」

セオの感謝の言葉を聞いてから、アレックスは扉へと向かう。馬車を運転する道具を用意しているアレックスの後ろ姿を眺めていると、アニーがこちらに近寄ってくる。セオが持っていたまだった空のグラスを受け取りに来たらしく、グラスを差し出すと手際よくそれを受け取る。

その際、そつとこちらに顔を近付けてくる。

「……弟は立場があるだけなんです。どうか許してやって下さいね」アニーがこつそりと耳打ちしてくる。

急に口数の減ったアレックスの横顔を盗み見ると、複雑そうな表情を浮かべていたが、どこことなく嬉しそうに塔の扉を開けている。

開いた扉から、昼前の明るい光が塔の中に差し込んでくる。存在

を主張してくるような明るさは、本当に久しぶりだった。地下室に居た時だって頭上の光取りから申し訳程度に光は差し込んでいたが、あれはガラス越しでもあった。だけどこの光は違う。

セオは体重を預けていた壁から背中を離し、光の方に向かって一歩足を進める。

光の先に待つ光景に思いを巡らせることが叶うなんて。感謝と申し訳ない気持ちでいっぱいだった。

(3) (後書き)

お目通し有り難うございます。

この部分は投稿直前で大幅に手を加えたため矛盾や不安定な部分、拙いところがあると思います。そのような箇所がありましたら指摘して下さいと嬉しいです！。

(4) (前書き)

起が長いですね…申し訳ありません(、・、)

アレックスが開けておいてくれた扉から外へ出ると、一面に森が広がっていた。馬車を止めるための小屋は近くにあったが、立派というほどではなく古臭さすら感じられる。

「わ……」

感嘆の声がセオの唇から零れ落ちた。10年前、初めて塔に入つた時は目隠しをされていたため、塔の周りはこのように森だったとは知らなかったのだ。

ユウラング名産である林檎の樹は生い茂っていなかったけれど、青々とした葉は初夏を感じさせるものがあり立派だった。塔の周りには伐採されている木も多かったため、太陽の光が十分に降り注いでいる。

「若様、少し待っててくださいね」

先に外に出ていたアレックスが振り返り、セオに向かって声をかけてくる。

「あ、ああ。分かった」

冷静を装って返したけれど、高揚した声は隠せなかった。くすりと笑い、アレックスは近くの小屋の中に入っていく。

正面に向き直る。整備されていない剥き出しの道が奥まで伸びており、その上には銀色の毛をした猫が横になってくつろいでいるのが見える。

「あ、お前……」

その猫には見覚えがあつた。先程地下室にいたあの猫の霊である。セオの呟きに反応したのか顔を上げ、ミヤアと地下室で聞いた時と同じか細い声を上げる。

アレックスやアニーが近くにいるので露骨に反応出来なかったが、

太陽の下で見る猫は地下室で見るより愛らしいものがあつた。伸び伸びとくつろいでいる。

微笑みながら一点を見つめていたからか、塔の施錠を終えたアニーがセオに訝しげな声をかけてくる。

「若様、若様……？」

アニーの声に気付いたセオがびくりと肩を震わせて隣に視線を向ける。呼吸を整えていると、様子を窺うように視線を向けてきた。

「あの、お体になにか不都合はございませんか？ 目眩や、頭痛、心だつて……その」

一息に尋ねられる。10年ぶりに外に出たセオを心配してくれているのだろうが、少し過保護に思えた。苦笑いを浮かべ、首を横に振る。

「大丈夫。寧ろ調子がいいくらいだよ。……人つてのは太陽の下にいるのが一番なんだろうね」

目を細め、風が頬を優しく撫でるのを感じながら呟くと、アニーは複雑そうに聞きながら最後には頷いてくれた。

「……若様のおっしゃられる通りなのかもしれませんね」

小さな声なので上手く聞こえなかったようだ。聞き返そうとしたのだが、それよりも先にアレックスが馬小屋から馬車を引きつれて出てきたため、それも出来なかった。

「若様、準備が整いましたよ！」

明るい声が森の中に響く。

「有り難う」

アニーには馬車で聞けばいい。そう思つて馬車の方に駆け寄っていく。そこには久しぶりに見た馬の姿があつた。栗毛をした二頭の馬は鼻息を荒く響かせ、つぶらな瞳で無遠慮な視線をぶつけてくる。気のせいか口内に涎が溜まっていた。

まさかとは思つが、初めて見るからといってセオを餌だとも思つてゐるのだろうか。そもそもアレックスはちゃんと餌をあげているのだろうか。疑わしい。

窘めるように馬の頭に手を置き、頭の毛を乱すように左右に動かし。しかし馬は煩わしそうに目を細め、セオの手が乗っかっているのも構わずぶるぶると頭を振る。

「うわっ！」

突然のことに驚き、慌てて手を引っ込める。こんな行為、本当に久しぶりだったので可笑しくて笑ってしまった。なにもかもが、一つ一つが本当に新鮮だった。新鮮という表現は適当ではないかもしれないが、新鮮だとしか言い表せられなかった。

「……さ、若様、お乗りください」

それまで、セオと馬とのやり取りをおかしそうに眺めていたアレックスが声をかけてくる。もう少し馬と戯れていたかったのだが、不審人物でも見付けたように馬に睨みつけられてしまっていてセオは渋々と頷いた。

後部席に慎重に上がりながら、最近動物と戯れる機会が多いことに思いを馳せる。最近なのでそれは殆どが靈魂なのだけれど。

そうだ、先程までいたあの痩せこけた猫はどうしただろう？

座席に座る前に振り返って確かめる。先程まで地面に寝そべっていたはずの猫の姿は、もうどこにもなかった。

「姉さんも乗りなよ！」

アレックスの声が入るまで、物悲しいようなよく分からない気持ちを感じていたのだが、アニーが来る前に奥に向かうことにした。固い座席に腰を下ろすと、目線が高くなっただけ先程とはまた違った景色が広がっていた。

最初に映ったのはどこまでも広がる青空だった。雲一つ見当たらない青空は、セオの外出を祝っているように思えた。

失礼します、とアニーが隣に座るまで見入ってしまった。それ程綺麗な青空だったのだ。

「んじ

や、行きますよ」

二人が座ったことを確認してからアレックスが鞭を奮った。ビシ

ツという音を合図に馬の鳴き声が周囲に響き、セオを乗せた馬車が入り口に向かって走り始める。

自分が動かずとも周囲の景色が変わる。久々のことに落ち着きなく辺りを見回していると、隣に居るアニーからくすりと笑う声が聞こえてくる。

「若様、子供みたいですよ」

目を柔らかくして話しかけてくる。母親に注意された子供のよくな気分になり恥ずかしい思いに見舞われた。

「す、すまない」

アレックスが馬車の運転に集中してしまっているのも残念ではあった。セオが何かしようがアレックスのフォローなど得られないからだ。

アニーと話しているよりかは、領の空気を味わっている方が楽かもしれない。アニーには申し訳ないが、領の景色を目に焼き付けておくことにした。

整備されていない道を走っているため、時折ガタツという音を立てて馬車が揺れる。それでも景色を眺めている分にはなんの問題もなく鑑賞できた。木しかないのだとばかり思っていたが、遠くから川のせせらぎの音が聴こえてくる。微かではあるがそれをきっかけに、外を堪能している気持ちが一層強くなった気がした。

「アレックス！ 市場までどれくらいだい？」

身乗り出すようにして運転手に声をかけた。

運転に集中しているとは言え、アレックスには人の声が聞こえるだけの余裕があったらしく、んー、という気の抜けた声が返ってきた。

「15分もかからないんじゃないですかねー？ 南部市場なら近いですし」

「……えええ！？」

それを聞いてぎょつとした。塔はもつと領土の片隅にあると思っていたからだ。まさか南部にあったとは。

セオの驚きをよそに馬車は森を進む。時折風が吹き葉を揺らしていた。それ以上聞くのもためらわれてセオは前髪に触れる。塔が出る前に身なりを整えてきたので必要以上に乱すことはためられたが、本当に素顔で外に出ていいのだろうか。心配だ。両親、ましてや父親とは似ていないのは幸運だったかもしれない。

落ち着かない気持ちを抱えながら、俯いているアニーに視線を向ける。セオの視線に気がついていないようだった。

「アニー」

何となく声をかけるのがためらわれたが、小さな声で彼女の名前を口にする。

アニーはびっくりと肩をひくつかせ今気付いたかのようにセオに顔を向けた。

「はい？」

「あのさ、本当に僕は素顔で大丈夫なのか？」

セオの質問を受けてああ……とアニーは呟いた。セオの目鼻立ちをまじまじと眺めてから頷く。

「……大丈夫ですよ。若様だって仮面とかは着けたくないでしょうし」

言い聞かせるように言ってくるのでひとまずは納得してみせた。ここ一年、父親の顔を見ていない自分がする心配ではなかったのかもしれない。

頷いて正面を見やると、塔を出たときよりも木の数が減っていて出口が近付いてきたのだと分かる。人が行き交う姿は見えなかったが、景色に建造物が映るようになっていた。

「お」

あの先端を尖らせている白壁の建物には見覚えがあった。大聖堂だ。10年前と少しも変わっていない。いや、鐘や壁が薄汚れているので確かに年月を刻んでいるようだった。食い入るように大聖堂を眺める。中には司祭やそれに準ずるものがいて、汗水流して神に仕えているのだ。そう思うだけでワクワクしてしまう。

その時、視界の隅に人影が映った。いつの間にか馬車は森を抜けたらしく、比較的整備された土の上を走っていた。その道の隅に人が居たのだ。走行中なので一瞬しか見えなかったのだが、いかにも農家の人間といった男性はセオのことを一瞬だけ眺め歩み直す。

「アニー、見たか？ 今の見たか？」

先程と同じく俯いているアニーに話しかける。冷静に考えると俯いていた人間が領の景色を見ていたわけないのだが、今のセオは冷静とは程遠い位置にいた。

突然声をかけられたアニーは驚きの表情を浮かべて顔を上げ、何を言うべきか困ったように唇を動かす。

「え？ あ……申し訳ありません、見ていないと思います」

言葉通り申し訳なさそうに頭を下げられる。顔を上げ急いで辺りを見回していたが、曲がり角を挟んでしまったため、男性の姿は既に見えなくなっていた。

今思い返すと、人影くらいではしゃいでしまった自分が恥ずかしい。思わず顔を背ける。

「なんでもない、気にしないでくれ」

「……はい」

素っ気なく返すと、アニーは再度口をつぐんでしまった。

それからというものの、馬車の上から見る景色や空は、透明感を損ねたように見えてしまい先程までの感動はなくなってしまった。

それでも新鮮なものには変わりなく、市場に到着するまでずっと空を眺めていた。人通りが増え、市場に用があるだろう婦人の姿が多くなる。

人とすれ違つと、その度セオに視線を向け誰かを確認してきていたが、セオの正体に気がついた者はいなかった。嬉しいような、ほっとするような、自分のことは本当に過去のことになってしまったのだと再確認したような気がして、複雑な思いだ。

「若様ー、もうそろそろですよ」

セオの思いと反して、アレックスの明るい声が耳に届いてくる。

もうそろそろと聞くと、軽いことだと思っていたのだが急に体に緊張が走ってしまう。

「あ、ああ。有り難う」

落ち着いて冷静に返したはずなのだが語尾が裏返ってしまった。速度を落としていく馬車の上で気持ちを落ち着かせるように深呼吸を繰り返していると、それに気付いたアニーからくすりと笑い声が聞こえてくる。

「そんなに緊張されずに堂々とされてください」

手を持ち上げ唇を隠しながら言われる。緩やかな曲線を描いている唇が覗き、いたたまれない気持ちになった。

「……心がけておくよ」

答えたのと同時にアレックスが立ち上がり、運転席から地面へと飛び降りる。それほど段差があつたわけではないので楽々と着地し、徒歩で馬車を誘導し始めた。

市場の横にある馬小屋に誘導されていく際、それほど高くない塀を見遣ると金色をした頭頂部が何個も見えていた。市場で買い物を楽しんでいる人だろうか。

それだけでも楽しくて、アレックスの誘導で馬車を降りながらも笑みが零れてしまった。

「若様、こちらが南部市場です。長居は出来ませんが……」

馬車を降りたアニーがセオの近くに寄り、市場の配置について簡単に説明をしてくる。

「あ、先行つて下さい」

アレックスは馬車を引き連れ、市場の奥にある厩舎に向かっていくのが見えた。

アニーの言葉に頷いて視線を市場へ向けたとき、ふと視界の隅に銀色の影が映った。無視すればよかったのだが、そんな気分にもなれなかった。市場に現れる幽霊の顔を見たかったのかもしれない。再度視線を向けたセオは、アニーの視線があるのも忘れて息を飲み、意外なものを見るときにするように目を丸める。

あれは

。

(4) (後書き)

お目通し有り難うございました。

(5) (前書き)

すみません、以前の話に矛盾がありまして修正させて頂きました。
本当は市場はさほど賑やかではありません。

短時間の公開ではありませんでしたが、修正前の拙作を読んで頂いた方は
本当に申し訳ありませんでした。

以後こういったことがないよう気をつけますので宜しくお願いいたします(´・`・´)

「……あつ」

セオの視線の先、市場の入口にいたのは地下室で見たあの痩せこけた猫の幽霊だったのだ。なにか気になるのか、塀を見上げ様子を窺っている。地下室と南部市場が近いとは言え、市場であの幽霊の姿を見ることがなるとは思わなかった。偶然と呼ぶには出来過ぎていような気がしたのだ。

セオが言葉を無くしていると、塀の向こう、市場の中から塀を登る銀髪の少女の姿が見えた。塀を登った、と形容するには軽々とした身のこなしを見せた少女は、ズボンを履いていて髪の長い少年のようだった。どこも欠損しておらず、幽霊としても女性としても珍しい存在だと言える。

なんにせよ、15にも満たないだろう年齢の少女が幽霊になっているというのは苦々しいものがあつた。

「若様……？」

胸の中で十字を切っていると、隣にいたアニーが様子を窺うように話し掛けてきていた。アニーの声に気付き慌てて顔を隣に向け、場を取り繕うように返す。

「な、なに？」

セオが反応したことに険しかった表情を和らげ、指を市場の方へ向ける。と幽霊のいた方を窺い見ると、少女も猫もいなくなっていた。

「先に市場に参りませんか？ アレックスもすぐに追いつくでしょうから……」

木と塀になにもいないことをもう一度確認してから頷いた。メイド服を着ている女性が目印ならアレックスも探しやすいだろうし、

セオだつて一刻も早く中に入りたかったのだ。本当に先に行つてしまふのは申し訳なかったが、今は本人の言葉に甘えておこう。

「そうだね。……それにしても市場つてこんなに静かだったかな？」
入口に向かいながら世間話をするように何食わぬ顔で尋ねると、暫く間を置いてからアニーが首を横に振り、決まり悪そうに声量を落として答える。

「いえ、１０年前よりも静かになったと思います。北部はもっと静かですが、南部はまだ賑やかです」

塀を潜るとそこには久しぶりに見る懐かしい風景が広がっていた。思い思いに初夏の装いを楽しんでいる女性達が、籠の中に入った果実や燻製を熱心に吟味している。中には内緒話に花を咲かせている者もいた。

懐かしい風景に目を奪われそうになりながらも、アニーの言葉に疑問を覚えたセオは視線を元に戻す。

「ん、それつてどういう意味だ？ 北部がどうかしたの？」

寄りたい店があるわけでもないのに、市場の雰囲気を感じながら聞き返す。アニーが懸念していたようにセオの存在を訝しむ人はまだいなかった。

「……北部には城がありますでしょう？ みな、城に騒音が届くのを恐れて静かにしているんです」

「え、どうして？」

もうすぐ弟や妹が産まれるといった情報はセオの耳には入って来ていないので、城に診療所でも抱えたのだろうか。

首を傾げてアニーの言葉を待つ。

「……最近になって、旦那様が領民を刑や拷問に処すようになったんです。元からされる方でしたが、今はその比ではありません。先日、騒音を理由に処刑された方がおりました。城の近くの民家から赤ちゃんの声がして執務に集中できないと、それだけで……だから、みな怯えてしまったのです。南部はメルロー子爵の管轄ですから、まだそのような心配は必要ありませんので」

感情なく一息に喋るアニーの横顔を黙って眺めていたセオは、懐かしい名前に思いを馳せる暇もなく、父親について信じられないような、信じられるような、複雑な気持ちで一杯だった。

確かに息子を幽閉してなんてことないように振る舞う父親だ。権力のために兄を手に掛けたことだってあった。しかし、セオが城にいた時から残酷な一面のある人だったが、難癖をつけてまで領民に手を出すような人ではなかったはずだ。犯罪者を使って事に及ぶなど、褒められはしないが自分なりのルールを決めている人だった。

しかしアニーの話を聞くと、節度を忘れて権力を振りかざすようになってしまったらしい。父親とユウラングの緩やかな変化を目の当たりにしたようで複雑だ。

塔を出る前、アニーが言っていた「様変わり」とはこれのことだったのか。

改めて市場を見渡すと、先程と同じだというのに領民の表情が違って見える。安心して見るように見えて頬が強張っていた。常に気を回しているのだろうか。

「……………そうか」

それだけしか言えなかった。もし自分が領の管理に関わっているのなら多少だろうと彼らに笑みを取り戻せたかもしれないが、現状では到底無理な話だ。いや、今後だって無理かもしれない。

一度目をきつくつむってから顔を上げる。アニーと目があったが、アニーも何も言っただけだった。ただ、ほんの少しだけ残念がつている気がして、それがますますやるせなさを助長させていた。

やるせなさをこまかそうと視線を市場の燻製に向けると、後ろから聞き覚えのある声がかかる。

「若様！ 姉

さん！ ここにいたんですか」

アレックスだ。馬車をしまい終え合流しにきたのだろう。アニーとの間にあった気まずい雰囲気壊してくれたのは、正直有り難かった。一方的に感じていただけかもしれないが、それでも息がしや

すくなくなったように思う。

「ああ、アレックス。待っててやらなくてすまなかった」

「いえ、俺が言ったんですし気にされないで下さい。で、なにか買われたんですか？」

人懐こい笑顔を浮かべながらセオ達の居る方へと近付いてくるアレックスの言葉を聞いて、反射的に引き攣った笑顔を浮かべて返した。

「あー……やっぱり、なにか買った方が良い……か？」

広間に出ている露店に視線を向け、遠慮がちに尋ねると、アレックスが力強く首を縦に振る。

「当たり前じゃないですか！ 市場で物を購入されないで何をされるつもりで？」

「ん、人間観察？」

真顔で返したら、はあ……と盛大に溜め息をつかれた。どうもこの答えが気に食わなかったようだ。

「じゃあアレックス、何を買ったらいいか教えてくれないかな」

「そうですね……これから身近に置ける物はどうです？ 今日という日の思い出用に！」

腕を組んで悩んでみせた後、名案を思い付いたとばかりに表情を明るくして返してくれた。

本人に一欠けらも悪意がないことは分かるが、セオとしては現実を突き付けられたようで複雑だった。曖昧な笑顔を浮かべて頷く。

「……そうだな。なにか絵でも購入しておくか」

さりげなくアレックスから視線を逸らし市場に視線を移す。

そつだ、出店にはなにも食料品だけが並んでいるわけではない。人気の画家が描いた絵を購入するのも良いだろう。ランプや装飾品でも良いかもしれない。

セオが悩んでいる時だった。それまで沈黙を貫いていたアニーの声が背中から聞こえてきたのだ。

「アレックス」

反射的に振り返ろうとしたのだが、己の名前を呼ばれたわけではないので振り返らなかつた。

「なに？」

近くの露店に視線を向けると樽に詰められたシールドルが売っていた。アニーに頼めばいくらでも飲めるので、これは買わなくても良いかもしれない。

「ちよつと貴方と二人で話したいの。いいかしら？」

「俺はいいけど……若様はどうするのさ？」

露店を眺めていると自分のことを呼ばれた気がして振り返る。アレックスと目が合ったがなにも言つて来なかつた。

「呼んだ？」

尋ねると、アレックスではなくアニーが代わりに答える。

「あの、若様。申し訳ありませんが、暫くこの辺りにいて下さいませんか？ 私、アレックスと話したいことがあつて……」

いきなりなんだ、とは思つたが、アニーの説明は納得出来たので頷いた。が、同時に疑問が沸き上がる。

「構わないけど、僕が逃げたらどうする気だ？」

世間話でもするように軽い口調で返したのだが、アニーは顔に影を落とし顎を引いて僅かに俯いた。

「……逃げたいんですか？」

質問に質問で返されるとは思つていなかった。慌てて首を横に振る。そんなことしたら間違ひなく二人が殺されてしまうのは分かっている。ある意味人質だ。

セオが否定する姿を見てアニーは満足そうだった。牽制をかけられたようで、セオは上手く笑い返せなかつたが。

「信じていますから。では、申し訳ありません。……アレックス」

アニーは珍しく明るい笑みを向けてきた後、アレックスの服の裾を摘み市場の奥に連れて行こうとしていた。何回か後退りながら声を上げる。

「この辺りに居て下さいよ！」

頷いて二人を見送った。二人は何事か話していたようだが、あつという間にセオには聞こえない位置に行ってしまった。

しかし、こうもあっさりと一人になってしまつていいものか。信用してくれているのだろうが、それにしてもあんまりではないのか。苦笑を押し込みながら振り返る。早速一人の時間を堪能しようと振り返つて 気がついた。

視線の先、塀の側にある木の下に銀髪の少女がいたのだ。先程、市場に入る前に見たズボンを履いた少女だった。腕にあの痩せこけた猫を抱いていて、真っ直ぐにこちらを見つめている。おかげで目が合つてしまったかもしれない。

彼らと目が合つてしまつと面倒なのは知っていた。一方的に話し掛けてきて、うるさいことこの上ないのだ。

無視を決め込もうと俯いたが、げんなりしてしまつた。少女が近づいてきたからだ。飾り一つない波がかった長い銀髪を揺らしてセオの近くに寄ると、大きな赤い瞳で、生き生きとした表情で話し掛けてくる。

絡まれる そう思っていたのだが。

「なあなあ、猫が言つてたんだがセオドアってお前か？」

まだ若い少女の声が疑問形で終わると、人の目も気にせず勢いよく顔を上げまっすぐ少女を見つめた。

無視なんか出来なかった。自由でいられる時間だということも忘れていた。

今までセオに質問してくる幽霊なんていなかったのだから。

(5) (後書き)

セオを略して表記してたのに意味はありません。ただ、もしセオド
アはドアを開けたとか描写したら私が笑い死にするからです(笑)
ややこしいでしょうか……？

「うん？ なにをそんなに慌てているんだ？ 私の存在が珍しいか？」

幽霊の少女は猫みたいに目を細め、悪戯に笑みを深め挑発的に告げてくる。心の奥底を見透かされたような少女の発言に戸惑いを隠せなかった。全くもってその通りなのだから。

少女から目を離せず、しかし何も返せずにいると、見るからに少女の機嫌が悪くなっていくのが分かった。腕を組み直立不動の姿勢を取りこちらを睨んでくる。

「むう……。お前は喋ることが出来ないのか？」

深紅の瞳をこちらに向けながら、何も言わないセオを見て苛立たしげに呟く。

ほんの少しだけ小ばかにされたような気がしたが、失礼な物言いはつとなり正気を取り戻していた。

「な……。しゃ、喋れる！ 君は本当に幽霊なのかと思っていたんだ」
周りに聞こえぬよう抑えた声でごまかすように言い返すと、セオの声におかしそうに笑いあっさりと首を縦に振る。

「うん？ 幽霊だぞ。ほらっ」

少女は猫を抱えていない方の手を持ち上げてセオの顔を殴ろうとしてみせた。

反射的に目を閉じ痛みにも備える。しかし、幾ら待っても衝撃は訪れなかった。

本来なら今頃痛がつているはずだ。不思議に思ったセオは恐る恐るゆっくりと目を開いた。視界には少女の伸ばされた腕が、確かに顔面に向かって伸ばされているのがはつきりと映っている。

眉を潜めた。痛さを感じないのだ。少しだけ違和感があったが、

それも意識しなければ気にならない程度だった。

「んー、これで幽霊だとは信じてくれたか？」

肩を揺らしてくすくすと笑い、腕を引っ込める。語尾を上げていたが、否定を許さない雰囲気があった。

「……君はなんだ？」

短く頭を揺らして頷いた後、尋ねた。答えにくそうにんーと悩んでみせていたが、言葉を選びながら一言一言丁寧に答えてくれた。

「私はリリヤだ。冥界の女帝をして、お前に用があるんだ。聞いてくれるか？」

短くまとめられたことにか嬉しそうに表情を明るくし、猫を強く抱きしめこちらの反応を窺うように見上げてくる。セオにしか聞こえてはいないだろうが、圧迫されたこともあり猫の苦しそうな鳴き声が辺りに響く。生きている人間には触れなくても、幽霊同士は触れるらしい。まだ混乱しているとは言え、頭の片隅では冷静な判断を下している自分がいるのに驚いた。

女帝、という比較的現実味を帯びた単語がかえって自分を冷静にさせているのかもしれない。しかし、それとこれとは話が別だ。

「待て。君はなんで、僕と話ができるんだ……？ 僕が今まで見てきた幽霊は、君と違って聞く耳なんて持ってくれなかったぞ」

それとなく視線を下げて、改めてリリヤと名乗った少女の全身を見る。

年齢はセオよりも下だろう。黒いローブもズボンも、ボロボロではないが全く高貴さを感じられない。光沢がないのだ。長い髪には櫛がよく通っているようだったが、飾り一つない。どこらへんが女帝なのか逆に聞きたかった。

自分が値踏みされていることなど気にした様子もなく、リリヤは一度深い溜息をついてから仕方なさそうに説明をしてくれた。

「それは、私が高貴な身分にあるからだ。そのかわり、下賤な輩には人間界に干渉出来ない余裕のない本能だけで動いている奴が多い

んだがな」

言葉を選びながら丁寧に、分かるように分からない説明をしてくれた。どうやらあちらの世界にも階級制度があり、程度の低い幽霊は人間達と話す余裕がないと言いたいようだった。そしてリリヤはその頂点に君臨している存在なので、セオと話せるという。

死んでいるのに徒党を組む理由はあるのだろうか。どうやって王を選出するのか。そもそも意志疎通の取れない幽霊を相手に階級制度が成り立っているのか。

疑問は尽きなかったが、外見や自分と会話できること、人に触れないこと、これらの要素を目の当たりにすれば、リリヤが特別な存在であることは一応信用してもいい気はした。とは言え、仮にも高貴な身分である人間が自分に用があるとは思えなかったが。

「それで、僕に何の用だ？」

よく尋ねてくれたとばかりに表情を明るくしていたが、後ろめたいことがあるのかすぐに顔毎視線を逸らされる。足元の小石を蹴る振りをしながら、言いくそくに弱々しく続けてきた。

「ああ、そうだ。あんな、……実は、その……」

今までハキハキとしていて威勢が良かったのに突然しおらしくしなを作る姿は、城にいた時に見た父親に媚びを売っていたメイド達の姿を彷彿させるものがあった。直感ではあるが、そういった女性の言葉に耳を貸してはいけない気がした。

セオが思い直して首を横に振ろうとした時、リリヤが口を開く。

「私と一緒にこの世を破壊しないか？」

リリヤの発言にその場の空気が固まった気がした。

少なくともセオは固まってしまった。自分の底の知れている語彙ではリリヤ

の言っている言葉の意味が分からなかったのだ。なにかの例えかどうか判断がつかなかった。

リリヤとの間に沈黙が広がる。視線を向けると、自分の発言に一欠けらの疑問も抱いていないようで、キラキラとした表情を浮かべ

てリリヤが立っている。それはセオの返事を期待して待っているようにもあつた。

リリヤには悪いが、はいいいですよと頷けるわけがない。なんと答えるか迷つた。

「あのさ……君、大丈夫？ その、心とか、頭とか」

うまい切り返しを探そうとしたからか、口をついて出たのは気の利かない平凡な言葉だつた。写本ばかり読んでいたというのに、肝心な時にうまい切り返しが出てこない自分が恨めしい。

「な、な……っ、気は触れていないぞ！ 真剣にお前に頼んでいるんだ」

セオの言葉を聞いて先程までの媚びた態度を改め、怒りに顔を赤らめている。その様子をどう解釈していいのか分からなかった。女の演技なのか、本音だつたのか。ただ、頷いては駄目だろうとは理解できたのだが。

「なら言わせて貰うけど、破壊つてなんだよ……。屈強な騎士が何人集まつたつてこの大地を壊すことなんて出来ないさ。それを僕に言うのは間違つていいると思わな」

「誰も直接的な破壊をしてくれとは言っていない！」

草一つ生えていない剥き出しの地面に視線を落として言うと、セオの言葉を打ち消すようにリリヤの怒鳴り声が鼓膜に突き刺さる。あんまりにも大きな声だつたのでびくりと肩が跳ねてしまった。

「私が言いたいのは……そう、お前達人間の価値観の破壊だ！」

「それって、どういう……」

いまだに身を強張らせているセオを煩わしそうに睨みつけながら、忌ま忌ましそうに、けれども物悲しげに続けてくる。

「私はな……拷問の末に死んだんだ」

「え？」

もうこちらに視線を合わせようとはしなかったが、いきなりそのような過去を暴露されるとは思わず動揺してしまった。

「冥界で色々な物に触れ、知り、分かつたよ……お前達人間は実に

下らない存在だとな」

セオの動揺を余所に、リリヤは当時のことを思い出すように話を続ける。

「領主は自分の立場に酔いしれたいがために民を虫けらのように殺し、災厄を魔女のせいにして無実の人間を火にかける。それらはお前達の下らない自尊心や迷信から発生したことだろう？　なのに、人間が人間を傷つける行いは減るところが増えているんだ」

息継ぎに一拍間を

空けたリリヤは返事を期待しているかのように視線をこちらに向ける。

「分かるか……？　お前達の世界は腐っているんだぞ！」

白くなるほどに唇を噛み締めながら吐き散らすリリヤの姿を見ていると何も言えなかった。幽霊達から見ると、自分を死に追い込んだ「迷信」がまだ世に蔓延っているのだ。しかも当然のように行われていたそれらは誤りだった。人間達はそれに気付かず過ちを繰り返す。もしかしたら遺族も同じような目に合うかもしれないのだ、この流れは堪らなく嫌なものだろう。

魔女狩り　飢饉や災厄は魔女のせいだとして最近始まった裁判だ。セオは間接的にしか知らないが、領主が戯れに領民にする拷問と変わらないことをしているらしい。寧ろ悪の根源の処刑という建前がある為、嬉々として行われている。おかげである種の狂気さえ感じるとアニーが言っていた。

「だからだ、お前達の価値観を誰かが壊さなきゃいけないんだ。これ以上無駄な死を招いてはいけない。けれど私は幽霊だ、代わりに動いてくれる人間の存在が必要となる」

先程までの昂ぶりが収まったのか、リリヤは淡々と言葉を紡いでいた。

なにが本当で、なにが嘘なのかまるで分からなくなってしまった。リリヤの言葉を信じていいのかも分からない。ただ、こつも胸糞悪い思いをしたのは久しぶりだということだけは分かった。

「私に代われる人間はセオドア、お前しかないんだ。だから……」

リリヤが言わんとすることは分かった。自分に何を望んでいるかも分かる。それでも、はいそうですかと頷けなかった。心の底ではリリヤを信用していないのかもしれない。

「……なあ君、なんで僕なんだ？」

一度深呼吸して気持ちを落ち着かせる。そうすると、見えないものも見えてくるような気がして、まずは一番の疑問をぶつける。

「それはお前が、セオドア・デ・ユウラングだからだ」

「それ、答えになってないよ……」

自分が望んでいた答えが返ってくるわけでもなく、大きな溜息がこぼれ落ちた。背中を幹に預けて深呼吸をする。

落ち着いてくると、段々詐欺にでもあっているような気分になってくる。現実離れしすぎていてリリヤの言葉が嘘に思えてきた。

そうだ、きっとリリヤは詐欺を働く幽霊なんだ。だから自分とも話せるのだ。女帝や階級制度などは最もらしい方便だ。何の得があるかまでは分からないけれど、そうに違いない。そう思ったかった。「じゃあさ、具体的にどう壊せと？」

だから、少しだけ意地の悪い質問をしても問題ないだろう。こちらには餌にされているのだから。

しかしリリヤはうるたえることなく、小ぶりの胸を張って当たり前のように答えてくれた。

「革命って言葉、知っているか？」

自信満々に物語の中でも稀にしか使われていない単語を使って返してくるので、セオは眉間に思いつきり皺を刻んでしまった。

(6) (後書き)

お目通し有り難うございます。ようやく一話終わった……！

2話 「信じてください」(1)

1

あの時、父上は僕に剣を向けた。

それでもなんとか父上から逃げきって、どこをどう歩いたか忘れてしまったけど、南部にある子爵の館に逃げ込んだ。子爵は僕を息子のように可愛がってくれたから、きつと助けてくれるだろうって思ったんだ。

子爵は僕を匿ってくれたけど落ち着いたら、兄上を失った哀しみと父上に殺されかけたショックがじわじわと僕の胸を支配していつて、涙と震えが止まらなくなってしまった。

父上は欲の深い人だから。父上はきつと権力に魅入られてしまったんだ。だから僕達兄弟を生かしておきなくなかったんだ。僕達が成長して、いつか親に毒を漏るようになる前に殺しておこうって……？ 考えすぎだよ、父上。

そう思うと悲しくて悲しくて、匿ってくれているというのに子爵に八つ当たりしてしまった。

僕はこれからどうすればいいんだろう。そう考え始めたのは、子爵の館に逃げてから一週間を過ぎた頃だった。城には帰れない。今度こそ殺されてしまうに決まってる。兄上の死は事故死となってしまうたらしい。僕もそうなるに違いない。

けど、ここには子爵に迷惑がかかるだろう。一人でどこかに行くか？ だけど、僕に侯爵家以外の生活ができるだろうか。一日やそこいらで結論は出せなかった。

そうこうしていると事態が変わった。子爵の館でこっそりと僕の世話をしてくれていた使用人が、金貨欲しさに僕のことを父上に密告したのだ。その使用人には、病気の母が居たという。

館を囲まれた時、僕は死を覚悟した。兄上の元にいけるなら、っ

て諦めた僕を見て「申し訳ありません」と子爵が泣いていたのを覚えてる。

それからあつという間だった。抵抗をする暇もなく僕は捕らえられた。どうせなら最後に焼き菓子を食べたかった。そう思っていると、父上が僕に告げてきた。

「……お前にはなにがなんでも生きていて貰わないといけなくなつた。だが居られては都合が悪いんだ」

こうして、僕の生活は抵抗も許されずに一変してしまった。

まず目隠しをされて塔に連れていかれた。そしてそこで幽閉されることになった。拒否なんて聞いてくれなかった。

僕の世話を見てくれるのは代々ユウラング家に仕えていたノレ家の姉弟、アニーとアレックスだった。二人は外出以外のことはなんでも聞いてくれた。焼き菓子を持ってきてくれたし、写本もくれる。トランプにも付き合ってくれる。僕の数少ない友達だった。

だけど、僕の誕生日を理由に父上のご機嫌窺いに来ていた貴族や商人の姿を見ることはできなくなってしまった。

段々と全てがどうでもよくなった頃、それは起きた。

写本を読んでいると頭上から声が聞こえてきたんだ。聞いたことのない男の人の声。それがはつきりと言ってきたんだ。

「いつかセオドア様を必ず外に出して差し上げます。それまでどうか希望を忘れずに、そして革命という単語を聞き逃さないで下さい」

誰か居るのかと勢いよく顔を上げる。けれど、僕が居る地下室には誰もいなかった。ネズミすらない。確かに声が聞こえたはずなのに。

今のはなんだったんだろう。懐かしい、そんな声だった。次第にあれは信託なんじゃないかって思えてきた。もしかして……凄い物を聞いたんじゃないかな。

すっかり興奮してしまった僕はアニーを呼んで今起きたことを説明した。身振り手振りね。だけどアニーは僕みたいに興奮してくれ

なかった。

それどころか、悲しそうに目を伏せて「そうですか」の一言。ア二ーのその様子を見てなぜだか僕は傷ついていた。今起きたことは人に話してはいけないのだと分かったから……。その話を誰かにすることは二度となくなつた。アレックスにも、母上にも言わなかつた。

ただどあれが幻聴だとは思おうとしなかつた。気が触れたわけじゃないって自分を信じたかつたんだと思う。

それから10年の月日が流れて僕もすっかり大きくなつた。自分が同い年の人よりも未熟者だと客観的に見えるくらい大人になつた。それでも、「革命」なんて単語一度も聞いたことはなかつた。たまに写本の中で目にするだけで、ただ毎日が淡々と過ぎていくだけ。あの時希望だと信じて疑わなくなつたものが嘘にすら思えてきた。なのに、なんで今更。

セオはリリヤの存在を確かめるように視線を向ける。今確かに「革命」と言つた。あの時の声は聞き逃すなどだけセオに言つた。それはどういう意味なのだろうか。領けということなのだろうか。リリヤが詐欺師だろうと聞けと言うことなのか？

分からなかつたが、先程よりも真剣にリリヤに尋ねるようになっていた。

「リリヤ……って言つたつて。君は本気で言つてるのか？」

10年間揺らぐことがなかつた光が、こんな形で現れることになるなんて思つていなかった。

先程よりも真剣に取り合うようになったからか、リリヤが嬉しそうに何度か頷いてくる。

「当たり前だ！ 私は世の中を、少なくともユウラングの意識を変えたいんだ」

一生懸命話しかけてくるリリヤを見ると、頷いた方がなにかが変わるかもしれないという思ひになつてくる。

しかし、頷くにしては情報が足りない。リリヤが自分を取り巻く状況を知っているのかも分からなかった。そうだ、これは大切だ。

「なあ」

「若様、お待たせしましたー……って、一人でなにやってるんですか」

質問をしようとセオが口を開きかけた時、向こうからやって来た人物の言葉が被さった。振り向かなくても分かる。アレックスだ。

「うん？」

突然、リリヤの楽しそうな声が聞こえてくる。先程までの一生懸命さを感じないところや今までの様子から察するに、随分と気持ちの切り替えが早いようだ。

「この間抜け面はお前の従者か？ それは嫌なところを見られたな
ー？ いやー、悪かった」

悪いなんて少しも思っていなさそうな声が届く。どうしてそこではしゃぐのだろう。

セオは眉間に皺が寄りそうになるのを我慢しながら咳ばらいをし、林檎の入った紙袋を持っているアレックスに視線を向けた。

2話 「信じてください」(1)(後書き)

有り難うございました。

(2)

2

「いやあのな、ちょっと劇の練習でも、なんて……」
「劇い？」

目を合わせようとせずともりながら返すと、当然と言わねば怪しまれてしまった。怪訝そうに眉を顰められる。

「若様がいつ劇をされるんです？」

当然の疑問だというのに、なぜだかどんどん肩身が狭くなっている。ちらりと隣を見ると、リリヤがこれ以上ないほど楽しそうな笑みを浮かべてこちらを見つめていた。

「……せ、聖誕祭とかどうだ？」

うるたえながらなんとか答えたものの、ユユラングでは9年前から聖誕祭を行わなくなったという話を思い出した。冬のユユラングはよく冷えるのだが、10年ほど前から一層寒さを増してきたようで、他領から嫁いだ母が根を上げ中止になったらしい。

「あー……いや、な」

ますます窮地に立たされた気がする。次はなんて言い訳しようかと考えていると、アレックスが複雑そうに笑って告げてくる。

「聖誕祭は中止になったんですよ、寒すぎて」

セオの記憶の行き違いに関する話はどうやらしたくないらしい。

紙袋を抱えていない方の手で帽子を深く被り直していた。

そして改まった口調で続ける。

「それで若様、……セオドア様。いきなりで申し訳ありませんが、頼みたいことがあるんです。笑わないで聞いてくださいね」

セオドア様。

アレックスは今こう言った。セオが城にいた時ですら、兄のシモンと区別する時くらいにしか呼んでこなかったのに。

いや、幽閉中アニーと3人でトランプをやっていた時も呼んでく
ることはあった。アレックスはジョーカーを引いてしまった時、セ
オを名前で呼ぶ癖があるのだ。あの時は随分分かりやすい性格をし
ているな、と参考にさせて貰ったものだった。

そうだ、アニーはどこに行ったのだろうか。

視線を市場に向ける。先程と変わらず市場は静かで、メイド服を
着た女性の姿はどこにも見当たらない。

「とりあえず話してくれ。それと、アニーは？」

市場に気を向けていたからか素っ気なくなってしまった。慌てて
口をつぐむ。しかしアレックスは何も言わなかった。そして、気に
止めた様子なく続けてくる。

「姉さんは用事を思い出したとかで、北部に行かれました。今日は
戻らないと。すみません」

「北部だつて？」

意外な単語につい声が裏返ってしまった。

歩いて北部に行くとなると、領土の中心にある森を迂回しなけれ
ばいけないため時間が掛かるはずだ。加えて自分を第一人に任せる
ほど、北部に行く用があるとは思えなかった。

突っ込んだ質問をしようと口を開いた時、遮るようにアレックス
の言葉が被さってくる。

「それでセオドア様、俺実は結婚したい人がいるんです」

「……………はあ？」

アレックスの口から飛び出してきた脈絡のない言葉に、間抜けな
声で返してしまった。気が削がれた気さえする。

「綺麗で分け隔てのない方なんです。メルロー子爵のご息女なんで
セオドア様も会ったことがありますよ。フラヴィ様です。御者だろ
うと凄く優しくしてくれまして」

意外だった。口を半開きにして聞いてしまうほど意外だった。子
爵に一人娘がいるのはもちろんセオも覚えている。快活で新しいこ
とが好きな、使用人にも笑顔で接していた少女だった。確かに彼女

ならアレックスと恋に落ちようが頷けるような気がする。

そうだとすると、アレックスはアニーと違い御者として城で生活していたはずだ。よく子爵家に馬を走らせているとは聞いたことがあるが、彼女と付き合いがあったなんて聞いたことすらない。

ゆっくりと口を閉じ直すとアレックスが続けてくる。

「結婚する前に一度俺の主人に会いたいわって言ってきたんです。あの、外出のついでだと思ってフラヴィ様にお会いして頂けませんか？」

頷きかけて止めた。疑問が生まれたのもあるし、自分の立場を思い出したからでもある。それにアレックスはあんなに口を酸っぱくしていたじゃないか。

「……待て、僕は何度もフラヴィに会ったことがあるぞ。幼なじみと言ったっていい。お前が彼女と結婚したいというならできる範囲で僕も手伝うけど、領民は騙せても彼女は騙せないんじゃないか？そもそも騙せる相手じゃないだろう？それに父上が帰られるまでと言ったのはお前じゃなかったか？」

「それはついでに姉さんが……あああつ。とにかく、セオドア様じやなきや駄目なんですよ！」

慌てて言い直される。よく分からないが少し前も似たようなことを言われた気がした。

リリヤもそうだったが、自分が知らない情報を話される割合が一気に増えた気がする。外に出るといふのはこういふことだったかもしれない。

「なにがだからだ、なにが」

外に出るといふことの意味を噛み締めながら返すと、アレックスの表情が微かに固くなるのが見えた。

どうしたのだろうと思っていると、アレックスが声を潜めて囁きかけてくる。

「……実はフラヴィ様、セオドア様が生きていることを知っているんです。その上で俺に言われまして」

「はああ!？」

まるで予想していなかった。

セオが生きているということはノレ家の姉弟と両親しか知らないはずではなかったのだろうか。いつから自分の生死に関する情報は軽い扱いになったのだろうか。

それでも、幼なじみだろうがフラヴィーが知っていていい情報であるわけがない。一歩間違えたら断頭台に送られてもおかしくない情報を彼女が握っている、とアレックスは言っているのだ。

「おい、どういことだ!？」

心配でもあったいきなりのことについて声を荒げてしまった。市場にいる領民にも聞こえてしまったかもしれない。一瞬だけアレックスの肩がびくりとなった。

「いえ……実はフラヴィー様、一回塔に来たことがあるんです。階段を降りはしませんでした……なにかの拍子でセオドア様の口から奥様や旦那様に伝わるのを恐れて今まで黙っていました。許してください!」

頭を下げて謝ってこられても、なんと返していいか分からなかった。幼なじみと従者が婚約関係にあるのも驚いたが、フラヴィーが自分が幽閉されていることを知っていて、なおかつすぐ近くまで来ていたことを隠されていた方が何倍もショックだった。

「……フラヴィーは、どうして塔に……?」

本当はもっと違うことを言いたかった。責めすらしたかった。しかし今の自分にはこれを尋ねるだけで精一杯なのだ。

しかしアレックスは顔を背けて言いにくそうに続ける。市場に向けているはずの目が泳いでいた。

「あー、浮気調査、が実を結んだようですね……」

あまり聞かれたくないようで、それ以上は何も言っていなかった。なんとなくではあるが理解できた気がする。尾行でもされ、喧嘩の末に口でも滑らせたのだろうか。ついこの間までは姉の後ろについて回る、トランプゲームの下手な御者だと思っていたのだが、セオの

知らない内にこのような話をするほど成長していたなんて思っていなかった。

大体結婚など大人のすることだと思っていた。少しは自分も大人になったと自惚れていたが、結婚なんて自分には一生縁がないと思っていた。それがアレックスにはあると言う。一番身近な人間の生々しい成長は堪えるものがある。友人を祝福したいという気持ちはあったが、反面置いていかれたような気がして上手く言葉が出てこなかった。

「だからって言ったら変ですが、お願いします。フラヴィ様に会って頂けませんか？」

複雑な思いを噛み締めていると、様子を伺うようにアレックスが尋ねてくる。

顔を上げるとアレックスと目が合った。悪いとは思いながらも目を逸らしてしまう。

最終的には頷く気ではいるがどうしても気持ちの整理がつかないのだ。他にも考えなければいけないことがある気もする。

「……悪い。返事の前に少しだけでいい。一人にさせてくれ」

セオが呟くとアレックスの目が不安げに揺れる。断られると思っただのかもしれない。慌てて首を横に振る。

「あ、いやっ。頷くから、もちろん頷くさ、素直に祝福したいよ。だけどな、心の準備ってあるだろう。……いきなりすぎる」

急いで付け加えると、見るからにほっとしているのが見えた。

「あ、すみません……。あの、それじゃあ俺市場を一周してきますので、また来ますね」

「三周にしてくれ」

一周じゃ足りないと思って口にしたのだが、緊張が解けたのかアレックスは肩を揺らして笑う。そして、驚くほど簡単にセオを一人にしてくれたのだ。自分よりも結婚の方が大切なのだろうか。

一人になったセオは一度深い息を吐く。色々なことを一気に話された気がする。

顔を前に向けると、いじけたようにリリヤが地べたにうつくまっ
ていた。

「あ」

すっかり彼女の存在を忘れていた。そういえば、リリヤとも話途
中だった気がする。

セオの声に気付きリリヤが顔を上げる。恨みがましそうな表情に
苦笑いを浮かべるしかなかった。

「……ごめん、忘れてた」

セオが謝ると頬を膨らませていたリリヤがますます顔を背ける。

「お前の革命に対する思いは、あの間抜け面の結婚話に劣るんだな」
どうやら完璧にいじけているようだった。ところどころ刺がある。
しかも自分は革命云々の話に頷いた覚えはないのだけれど。

リリヤなりの嫌みかもしれないと苦笑を浮かべ、視線を合わせよ
うと身を屈める。視線が近くなると躊躇いがちではあるが目を合わ
せてくれた。

「間抜け面じゃなくて彼はアレックス。僕の従者で、御者なんだけ
ど」

子供に言い聞かせるように話しかけたつもりだったが、どうもリ
リヤはそれすら気に入らなかったらしい。セオを見ていた顔が人を
威嚇する小動物のように陰しくなっていく。

「……ふんっ、間抜け面を庇うのか。あの間抜け面の話を信じるな
んで、お前、人を疑うことを知らないんじゃないか？」

人を小ばかにするような態度で続けてくる。

威嚇されるだけならまだ良かったが、その上馬鹿にされるとなる
と我慢できなかった。

「おい、どういう意味だ」

僅かに怒気を孕ませながら返すと、ふいとリリヤが視線を地面に
落としていた。

そしてぼそりと続ける。

「……あいつ、嘘ついてるぞ」

(2) (後書き)

有り難うございました。

(3)

あまりにも馬鹿げた事を言ってくるので、露骨に眉を顰めてしまった。

「……君さ、人を騙すのもいい加減にしなよ」

若干怒気をはらませながら返すと、みるみる内にリリヤの顔が怒りで赤くなっていくのが分かった。

怒りたいのはこちらと同じだ。今まではリリヤの礼を欠いた言動をどちらかと言えば宥めてはいたが、こうも友人を馬鹿にされるのは我慢がならなかった。

こちらにも怒っているのだということを示すようにぷいと顔を背ける。

「なっ！ お前は私の言う事を信じないとしても言うのか！？」

信じられない、と言った声で言われるが、本当に信じられないのだから仕方ない。つい先程会った幽霊の言うことをどうして信じられると言うのだろうか。

「……ああ、信じられるわけないさ、会話できる幽霊が居ること自体最初から信じてもいなかったけどね！それに、アレックスが僕に嘘をつくわけない。馬鹿馬鹿しくてなにも言えないよ」

セオも頭に血が上っているため、つい本音を口にしてしまった。

当然言い返されると思っていたのだが、リリヤの言葉は返ってこなかった。静寂が辺りを包む。

不思議に思い表情を盗み見ると、どこか意外そうな表情を浮かべてこちらを見ってくるリリヤの姿があった。

「な、なんだよ……。なにか言いたいこともあるのか？」

てつきり口論になるかと思っただけに、リリヤの態度には拍子抜けしてしまうものがある。

「いや……なんでもない。それよりお前、嘘をついている奴の言葉を信じる気か？」

銀色の長い髪を揺らしながら言うと、リリヤは人を小ばかにするよう目細めて尋ねてくる。先程まで浮かべていた意外そうな表情はどこにもなかった。

またアレックスを嘘つき扱いされた。気持ちを整理したいというのに、こんな調子では気持ちの整理なんてできるわけがなかった。眉を顰めてリリヤを睨みつける。

「まあね。僕には君の方が嘘をついているように見えるからさ」
返答、と呼ぶには明確でない返しをしてリリヤから顔を背ける。

自然と視界に映る景色が変わり、セオは相変わらず静かな市場の風景を眺めることになっていた。リリヤは何も言っていない。自分の言葉が過ちだと気付いてくれたのだろうか。

ようやく一人の時間が持てそうだ。小さく息を洩らしながら考える。

フラヴィとはここ10年会っていなかったが、アレックスとは3日に一度は会っていた。もし結婚なんてしたら自分より家庭を大事にしまい、自分のことを忘れてしまうのではないだろうか。いや、フラヴィと一緒に塔に来ることだって有り得る。そうやって欲しいものだった。

「あつ」

塔という単語で思い出したことがある。リリヤに言うておくことがあった。振り返ってリリヤの姿を探す。

「リリヤ？」

リリヤはあの銀毛の猫を抱え、やはりうずくまっている。意地でも張っているらしく名前を呼んでも反応一つ見せてくれない。負けじと話しかける。

「あのさ、君。なあ、なあってば。頼みがあるんだけど……なあ、リリヤ」

名前を呼ぶと、ぴくりとリリヤの肩が震えた。どうみたって聞こえている。それなら振り返ってくれたって良いのに。

そつえば城にいた頃もこういうことがあった。アキネス領領主

の娘がユウラングまできた時だ。同い年だったとは言え、緊張してうまく話しかけれなかった結果、機嫌を損ねてしまいこうして口を利いてくれなくなったのだ。

その時はこちらが紳士的に振る舞えば笑ってくれた気がする。リリヤに通じるかは分からないがやってみて損はないだろう。

「リリヤ嬢」

改めて声をかける。するとリリヤは、あの時の娘のようにほんの少しだけ得意げな表情を浮かべ、半分ほど振り返ってくれた。

「……………なんだ」

「あのさ、子爵の家に君も来てくれるかな？」

語尾が震えてしまったのは緊張してしまっただからかもしれない。

自分は、塔の中にいた時のあの言葉を忘れたわけではないのだ。そのためにも、彼女には近くにいて貰いたかった。それが一番の近道だろうから。

ここまで考えてはつとした。これではまるで自分があそこから逃げたいみたいだ。アニーに言った逃げたらどうするの？ という何気ない言葉は、実は自分の本心だったのかもしれない。

セオの気持ちとは反対に、嫌そうな声が聞こえてくる。

「……………それはなんだ。私にあの間抜け面の婚約を祝えと言ってるのか？」

機嫌が戻ったのかリリヤの視線を真正面から受けることになった。慌てて首を横に振る。

「ちが」

「また劇ですか？」

その時、聞き慣れた声が頭の上に振りかかった。振り返らなくても誰だか分かる。ことごとく嫌なところを見られるものだ。

「あ、間抜け面！」

嫌そうな表情を浮かべていた筈のリリヤが途端に歓喜の声を上げる。まるで再び訪れたこの状況を喜んでいるように見えた。

「随分と熱心ですね」

ゆっくりと振り返る。そこには思った通り、帽子を被った少年アレックスがいた。不思議そうな表情を浮かべてこちらを見つめている。

リリヤとのやり取りを劇だと思っているのならまだ助かったものだ。突っ込まれては困るが、劇なら言いようはいくらでもある。

話を逸らそうと急ぎ気味に質問をする。

「おい、早くないか？」

しかし、アレックスは心底意外そうに目を丸めてきた。

「え、そうですか？　ちゃんと三周したんですけど」

振り返り市場の方に視線を向けていたので、つられてセオも市場に視線を移す。アレックスがセオの言葉を不思議に思うのも頷けた。思っていたよりもこの市場は広くなかったからだ。これなら十周ほど回って貰った方が良かったかもしれない。

自分の失態を呪いながら、場を取り持つべく頷いた。

「……まだなにも気持ちの整理なんてついていないぞ」

視線を戻す際、残念そうな表情を浮かべているリリヤの姿が見えた。もし先程よりも動じなかったからという理由でそうしているのなら、随分酷い話だと思う。

セオの言葉を聞いて、困ったようにアレックスが笑った。

「ですが、俺もう三周しましたから。約束は守って頂きたいですが

……」

すぐ引くかと思っていたが、アレックスは引かなかった。発音悪く紡がれる言葉は正論であるだけに、セオもなにも言えなかった。それに、こうまで強く言ってくるアレックスも珍しい。よっぽどブラヴィに会わせたいのだろう。

返す言葉に詰まっているとアレックスが続けてくる。

「じゃあ、馬車に乗ってください！　大丈夫ですよ、馬車でも物は考えられますから」

そういう問題じゃない！　と言おうとしたら、背中を押されて歩かされてしまった。舌を噛まないように歯を噛み合わせることを優

先してしまったため、反論なんてできなかった。

「一瞬でも子爵にお会いできるかもしれませんね？」

背中を押される具合と歩幅がうまく合わず、足がもつれてしまいそうになるのを堪えていると、後ろから嬉しそうな声が聞こえてくる。

「……まさかとは思うが、子爵も僕が生きているのを知っているのか？」

さすがにげんなりしてしまった。

子爵関係となるとアレックスは口が軽くなってしまうのではないだろうか。子爵に会えるのはフラヴィに会えるよりも数倍嬉しいが、このことが発覚した際のアレックスの処罰の重さがどうしても気になってしまう。さすがに爪5枚では済まされないはずだ。

人や看板に当たらないよう注意して歩きながらアレックスの返事を待つ。

「うーん、知らないと思いますよ？ フラヴィ様も言わないと思いますけど……あ」

口にしてからまずい、と思ったように慌ててアレックスが自分の口元を手で覆い隠していた。

「……やっぱり僕は帰る。悪い、フラヴィのことは諦めてくれ」
些か軽率に思えて眉間に皺を作ってしまった。

悪いが結婚の件は延期にして貰おう。なんならフラヴィが塔に來たつていい。子爵に会えるのは嬉しいが、アレックスにそんな危険な真似させられない。大体、今ですら危険なことをしているだろうに。

「あああ！ すみません！ ……子爵に会わなくなつていいです！ だからフラヴィ様にはお会いしてくださいっ」

肩から手を離して、必死に頭を下げられてしまった。出入り口に來たこともあるし、子爵に会わなくてもいいとなるとセオも考えてしまう。

アレックスがこんなに必死になることだしな、と思って小さな声

で続ける。

「子爵に会わないで良いなら、まあ……」

「じゃ！ 馬車持つてきますから少しお待ちください」

胸を撫で下ろしながら間髪入れず告げられる。アレックスは一度こちらに向かつて頭を下げ、すぐに馬小屋の方に向かってしまった。一人になって思ったことは、こうも正直なアレックスが嘘をつくわけがない、だった。そう思うとなぜだか安心できた。

嘘で思い出したことがある。リリヤはついて来てくれているのだろうか？

急いで周囲に視線を向ける。けれど、周囲には市場に入ろうとする女性の姿があるだけで、銀髪の少女の姿はどこにもなかった。

「あ……」

思えば、誘ったはいいが返事を聞いていなかった。アレックスの婚約のためだと思っているのかもしれない。革命を持ちかけられたことにも返事すらしていない。

リリヤがついて来なくても当たり前だと言うのに彼女の姿を探すのは……勝手すぎないだろうか？ 後になってこんなに慌てるなら、もっと真面目に彼女の話聞いておくべきだった。

(3) (後書き)

有り難うございました。

このままリリヤと別れてしまったら。

昔塔で聞いた神託通りにはいなくなってしまうのではないだろうか。希望にしていたものが、こうもたやすく壊れるなんて思っていなかった。少し無視していただけなのに。

……いや、リリヤからして見れば少しじゃないはずだ。自分の考えの無さが悪いのだ。俯いて唇を噛み締める。乾いた大地が視界に映るのも一層現実感が増してくる気がした。

「セオドア様」

その時、頭上から聞き慣れた声に名前を呼ばれた。馬車を持ってきたアレックスだろう。暗い顔を見られたくはない。

ゆっくりと顔を上げ 目を疑った。

アレックスの後ろ、座席に当然のようにリリヤが座っていたのだ。黒いローブの中で足を組んでおり、その姿はまるでアレックスの馬車が自分の物であるかのような雰囲気すら感じられた。

驚きのあまり目を見開いてアレックス、正確にはリリヤを見つめてしまっていたからか、アレックスが反応に困ったように曖昧な笑みを向けてくる。

「あの、俺になにか」

尋ねながら手で帽子の位置や襟を直していた。自分になにかあると思わせてしまったようだ。

「あ、や、なんでもないっ。た、ただ……お前の馬は立派だな、って思っって」

「馬なんて見てなかった癖によく言えるな？」

慌てて話を濁し騎乗を試みると、椅子に座ったリリヤが茶化すような声を投げかけてくる。当然とは言え、アレックスに聞こえていないのが不思議で堪らなかった。自分にはこんなにはつきり聞こえるのに。

きつと睨みつけてやると、数回瞬きをしてからつまらなさそうに顔を背けられる。ついて来るならついて来ると言ってくれれば良かったのに。

これでは先程反省までした自分が間抜けのようではないか。

「あ、立派ですか？　へへっ、俺もそう思っていました。やっぱり分かりますよね、この優美さ。名前もつけて可愛がつてるくらいですよ。こっちがフェルナンデスで、あっちがシンシアって」

「あ、出してくれ」

リリヤの隣に座り、いまだ収まらない苛立ちを隠しながらアレックスの話を遮る。一瞬だけ話し足りなさそうに唇を尖らせているアレックスの表情が見えたが、気のせいだろう。

「……………俺、何かしました？」

ガタンと馬車が揺れ、前へ進みながら尋ねられる。隣に座っているリリヤを一度見てから返す。

「いや、人の気持ちも知らないで偉そうにしている鳥が僕の席にいてさ、

つい。アレックスはなんにも」

「はあ…………？」

アレックスは理解できていないようだったが、隣にいたリリヤには効果があったようで、

「なっ、ついて来いと言ったのはお前だろう！　大体どうしてお前が拗ねるっ」

と声を荒げて反論してきた。

ガタンゴトンと馬車が震動する音に紛れて小さな声で返す。

「誰も拗ねてなんかいないけど」

言い返すと今まで座っていたリリヤが立ち上がり、地団駄を踏み

始める。

「お前子供だなっ！ あああつ、こんなやつに革命なんてできるわけないだろうに！」

リリヤが騒ぐ度に馬車がギシギシと軋んでいた。不自然な音に何度も心配そうにアレックスが振り返っていた。

「……セオドア様、馬車は一つしかないので鳥が邪魔だろうが壊さないで下さいね」

リリヤが立てた音だというのに自分が注意されてしまった。理不尽に思えて何も言えない。

「それに、もう子爵の館ですから。結構近いんですよ」

悶々とした気持ちを抱えているとアレックスが声を明るくする。立ったままのリリヤを横目で睨みつつ景色に気を向けると、そこには懐かしい景色が広がっていた。

煉瓦作りの館がそこに存在していた。立派な外観は10年前と対して変わっていないように思えた。作り物の鳥が乗った門も、セオが好きだった入り組んだ庭園も、なにかもが10年前と同じだ。懐かしい、としか言いようのない気持ちに胸が熱くなる。

「ふんっ」

ようやく暴れるのを止めたリリヤが鼻を鳴らし着席する。再び足を組む様子は尊大なものがあつた。

子爵の館が見えてくるとアレックスは馬車の進みを遅くしていく。どうも屋敷の外に止まるようだった。子爵に会わないようにするためなのだろうが、後ろめたさがしてならなかった。実際、後ろめたいのだが。

馬車の動きが完全に止まり、館の外壁にぴつたりと沿うように馬車が隠れる。そして、アレックスが地面に降り立ちこちらを見上げてきた。

「俺フラヴィ様呼んできますから、そこに居て下さいね」

ハキハキとした声でそう告げてくると、アレックスは館の入口の方に向かう。見る見る内に後ろ姿が離れていった。

着席したもののリリヤはまだ機嫌が悪いようで、頬を膨らませながら決してこちらを見てこようとはしなかった。どっちが子供だと言うのだろうか。

「そもそも、だ」

不意にリリヤが口を開く。

「どうして私がついていかなければいけない。意味はあるのか？」

不満げに言われ、答えを求めるようにこちらを見てくる。血のように赤い瞳には、目を逸らしてはいけないと思わせる力があり、セオはリリヤから目を離せなかった。

「なんだ？　ないのか？」

瞳だけを気にしていると、リリヤがやっぱりなという含みを持たせてこちらを煽ってきた。

一度目を閉じてから返す。

「あるよ。君に聞きたいことがあってさ、ちょっとね。あんなところじゃろくに話も出来ないからさ。まあ……子爵のところに寄ることになるとは思わなかったけど」

当たり前障りなく答えるとあからさまにリリヤが肩を落としていた。……なんだ、そんなことか。お前も男なら周りを気にせずに堂々と私と話せばいいじゃないか、人をやましいものみたいに扱ってくれるなっ」

残念そうに告げられるが、昼間の市場で幽霊と話せる人間は女だらうがない気がする。すぐに警備隊を呼ばれるに決まっている。

「君は十分やましいものだと思っただけだね」

はあ、と深い溜息が零れた。

「フラヴィ様！　お待ち下さい！」

門の近くからアレックスの声が聞こえてきたのはその時だった。

フラヴィという名前を聞き、身体が自然と強張ってしまう。

「アレックスってば固いわね、それに私とテッドの仲に遠慮なんて存在しなかったから良いのよ！」

ハキハキとした女性の声が聞こえる。懐かしさを感じてしまうのも当然だ。

頭が混乱してしまう。人の空気には慣れたつもりでいたが、再会は初めてだ。練習なんて出来るわけがない。それに、向こうは遠慮をしないらしい。

顎を引いて身構えてしまった。

「おい、幼なじみに会うだけじゃないか、緊張するな」

呆れたようなリリヤの声が聞こえる。首を横に振り自分の気持ちを肯定しようと首を横に振った。

「簡単に言ってくれるけどさ、10年ぶりだよ、10年。それにあの時のままならフラヴィは緊張もしたくなる子で」

「あつ、来たぞ」

面倒臭そうな顔をしてセオの話の聞いては頷いていたリリヤが、セオの後方を見て今までは違った声を上げる。なんのことだかすぐに理解できた。フラヴィだろう。表情が強張るのが分かり、ゆっくりと振り返る。人はこういう時どういう顔をするのが一般的なのだろうか。

振り返った先には、予想通りと言すべきか少女が一人門の前に立っていた。長く豊かな金髪を腰ほどまで伸ばし、緑色のエプロンドレスを着ていて自分の方を見ている。子爵令嬢らしからぬ飾らない格好がとても似合っている、そんな少女だった。

フラヴィだ。すぐに分かる。女性の階段を登り始めているものの、あどけなさの残る顔は全くとっていいほど変わっていなかった。

「……っ」

こちらをまっすぐ見つめたまま動こうとしないので、なにを言ったらいいのか迷ってしまった。

セオが固まっていると、フラヴィはようやく追い付いたらしいアレックスに顔を向け、無遠慮に指を差し首を傾げて尋ねる。

「……これ？」

これ、とはセオのことだろう。ほんの少しだけ不躰なところも何

も変わっていない。

「ちよっ……これ、じゃないです、この方、です！」

フラヴィの言葉遣いを注意するアレックスの声にはっとした。そうだ、感傷に浸りに来たわけではないのだ。

「うるさいなー」

ふいとアレックスから顔を背け、フラヴィの顔がこちらを向いた。青い瞳に値踏みされているような感覚に襲われる。

「……相変わらずだね、フラヴィ。久しぶり」

喉から声を搾り出し話しかける。言ってからもっとマシな言葉がなかったのかと、自分の語彙の少なさを呪ってしまった。

セオが口を開くと、フラヴィは目を丸めて沈黙していた。まじまじと、珍妙なものでも見るような視線を向けた後、なにかが弾けたように口を開きまくし立ててくる。

「えっ、やだ、本当にテッドなの！？　ちよっと待って待って、わっ、テッドだあ……本当に本当に生きてたのねアレックス！」

嬉しそうな声を上げ、今にも馬車に上ってきそうな勢いで近くに寄ってくる。

「だから言っただじゃないですか！　それともっと静かにして下さい！」

アレックスがフラヴィを制してくれている間に馬車から降りることにした。馬車の上にいると、一層目立つ気がしたのだ。

馬車から降りる際、一連の流れを見ていたりリヤが疲れたように肩を竦めて溜息を吐いていた。

「……まあがんばれ、私は見てておいてやる」

(4) (後書き)

有り難うございました。

(5)

5

「テッドーテッドー、アレックスって細かいと思わない？」

馬車から降りるとすぐにフラヴィが駆け寄ってきた。彼女なりにセオの立場を気にし始めたらしく、先程よりも声は抑えていてくれたが、それでもうるさいことには変わらない。

「……」

同意を求められても困る。自分はアレックスを陥れたいわけではないのだ。

返事をしないでいると、フラヴィは幼い女の子が傷ついた時にするように目を伏せ、ふいと顔を背けてしまった。変わっていない幼なじみに苦笑いを浮かべていたが、ふとここに来た目的を思い出し話題を変えた。

「フラヴィ、僕は君とお喋りしてきたわけじゃないんだけど」

「じゃあ、なに？」

フラヴィはアニーよりも背が高いようで、セオと変わらない目線で聞き返してくる。幽閉されるまでは自分の方が背が高かったのだが、こつとも簡単に追いつかれてしまうとは情けないものがあつた。

セオが話を始めると、アレックスが複雑そうな表情を浮かべて帽子を被り直しているのが見えた。

「アレックスと結婚したいから僕に話があるんだろう？」

リリヤと話している間に考えた一文を口にするだけで、無性に喉が渴いてしまった。

しかし、セオの言葉を聞いたフラヴィは何を言われているか分からないらしく、しきりに瞬きを繰り返している。

「えっ？」

不思議そうにこちらを見つめてくるフラヴィが、「そうそう！」と続けてくる様子はなかった。

「いや、だから、結婚。するんだろ。それで僕に話があるとか……なんだ、解雇か？」

奇妙な沈黙が周囲を包んでいた。耐え切れず、セオは口早に繰り返す。自分の切り出し方が悪かったかと考えていると、フラヴィが俯いていた。なにか思い出しているようにも見える。

「結婚？ 私と、アレックスが？」

呟くとアレックスの方を向き首を傾げる。ふんわりとした金色の髪が、ぱさりと音を立てて肩から落ちた。

「アレックス、なんの話？ 私知らないけど？」

「あ、いや、……あの、後でお話します。申し訳ありません」

居心地悪そうにしていたアレックスが気まずそうにフラヴィに話す姿を見て、なんとなく理解できた。自分はあるもしない結婚を理由にこの館までつれられてきたのだ。

リリヤが言っていたことはこのことだったのか？

「アレックス、どういうことだ？」

問いを投げかけると、馬車の上で黙って話を聞いていたリリヤの声が聞こえてくる。

「ほーらみる」

状況を完全に理解できていない今は、リリヤの全てを見透かしているような声すらカンに障る。

「……うるさいな！」

二人に見えていないと分かっていたが声を出して反論していた。突然声を上げたセオに驚き、肩をびくつかせるフラヴィと、面白くなさそうに髪を弄り始めたリリヤの姿が視界に映る。

アレックスは突然不可解な行動を始めるセオには慣れているようで、動じた様子も見せず口を閉ざしていた。

「どういうことだ！」

声を張り上げて、もう一度問い詰める。視線を上げたアレックスがなにか言いたげに口を開いた。まずい、といった表情だ。

「アレック、スウっ!？」

名前を呼ぼうとしたが最後まで言葉にできなかった。体が変な浮遊感に見回れ、必然的に何歩か後退を強いられる。誰かに自分が羽織っているロングジャケットを引っ張られたからだ。

「っ……」

思わず息を詰まらしてしまった。このようなことをするのはフラヴィしか考えられない。文句の一つくらい言ってやろうと思った。

「なにす」

振り返る途中で気付いた。フラヴィはアレックスの隣、自分の正面にいるじゃないか。背中を掴めるわけがない。では、自分を掴んだのは誰だろうか。

振り返った先を見て固まってしまった。少々髪は薄くなっていたが、取っ付きにくそうな雰囲気は変わっておらず、すぐに誰だか理解できたから。

そこにいたのは、フラヴィの父親　メルロー子爵その人だったのだ。

「父さん……っ」

先程まではハキハキとしていたフラヴィの声が弱々しくなっている。フラヴィも事の重大さは理解できたのかもしれない。セオの存在は秘密だと、アレックスからもきつく言われているはずだ。だからこうして門の外で隠れるように会っていたというのに。話もすぐに切り上げて帰るつもりだった。

なのに。

「うるさいな、君」

どこことなく滑舌の悪い低い声。声まで昔と同じだ。一瞬だけ懐かしさが込み上げてきたが、すぐに現実に戻されてしまった。

「見たところ貴族のようだが……癩癩を起こすようでは、貴族としてまだまだだ」

母親にあつらえて貰ったため、セオは平民層には用意できない質のいい服を着ていた。メルロー子爵はそれで判断したようで、セオを貴族と見なして話を続けようとする。

「なに偉そうなこと言ってるのよ。……どうせ私を尾けてきたくせに！ いいからテツ……ディを離してあげてよ」

フラヴィが言葉を濁しながら、嫌そうに告げる。テッドがテディになったとしても何も変わらないと思うのだが、フラヴィには更なる訂正を加える冷静さはないようだ。

一度振り返り、助け舟を出してくれることを期待してアレックスを見ると、アレックスは気まずそうにメルロー子爵から目を逸らしていた。どうやら、目で訴えかけることは出来そうにないようだ。

これはどうすればいいのだろう。どう対応すればいいのだろう。アニーは自分の様子を毎週のように文に認め父に報告していたが、だからといって父が自分に会いに来たことはない。自分に興味が無いのかもしれない。いつそ自分だと暴露してもいいのではないだろうか。

……いや、アレックスがフラヴィの存在を自分に隠していたのは万が一を恐れてのはずだ。なら、子爵にも自分の存在は伏せておくべきだろう。アレックスの同意を得られないのは不安であったが、仕方あるまい。

「フラヴィを口説きにでも？ ……爵位と名を窺っても宜しいかな？」

声音は優しく、いかにもセオの返事を待っているような聞き方だったが、有無を言わさぬ圧力が存在していた。黙り通せるわけがない。

分かってはいるが、本題を先伸ばしにしようという悪いあがきをしてしまった。

「あ、や、僕はフラヴィを口説きにきたわけでは……」

やましいことはしていないのだが、目を合わせてはつい逸らしてしまう。子爵にはそれすら不審なものに見えてしまったらしい。

「名と、爵位は？」

セオの言い訳を取り合ってくれるわけもなく、子爵は繰り返し尋ねてくる。アレックスはどうして良いか分からず困り果てていた。子爵が現れてからと言うもののこの調子だ。

「……テディです。爵位は」

当たり障りのない範囲で曖昧に答えるが、途中で言葉に詰まってしまった。爵位を正直に言っているものだろうか。いや、駄目なはずだ。

「だ、男爵……だったかな……」

正直に言えるわけもなく、かといって貴族であることはごまかせるわけがない。曖昧に答えると、子爵は感情の読めない瞳をこちらに向けてきた。

なぜこう取り調べのような真似をされなければいけないのだろう。早く解放してほしい。そして向こうに行ってほしい。セオの頭にはそれしかなかった。

「どちらの領から？」

「……アキネスです。フラヴィとは、あの」

咄嗟に口にした領の名前は、ユウラングのものではなかった。南部市場にはアキネス領の人間もくと聞いていたし、アキネス領の方が何かと都合がよいと思ったからだ。しかし子爵の反応はセオの予想とは違うものだった。

「アキネス？ 本当に？」

疑うようなこの反応はなんだろう。なにかまずかっただろうか。アレックスの方を見ようにも何度も振り返る状況なわけではない。

肩身の狭い思いを味わいながらセオは慎重に首を縦に振る。

「はい、アキネスからです。何を疑っているかは分かりませんが、信じてください。もううるさくしませんので……申し訳ありません、お騒がせ致しました」

昔は自分に泣いて謝って来た子爵に、このような態度を取るのには不思議なものがあつたが仕方ない。それよりも早く終わらせたかつ

た。

「アキネス領の男爵がそんなに良い服着れるわけないだろう、お前馬鹿か？」

それまでは黙っていたリリヤが、口を開いた。死刑執行の日にちを告げにきた番人も、このような声を出すに違いない。そう思いたくもなってしまう、冷ややかな声だった。

2話了

(5) (後書き)

有り難うございます。これで2話終わりです。次からようやく伏線回収話(*、*、*)

第3話「そんなことのために」(1)(前書き)

パソコン閲覧の方は暫く章管理がおかしいですね…申し訳ありません。後ほど修正させて頂きます。

第3話「そんなことのために」(1)

第3話「そんなことのために」

立ち居振る舞いや、着付け、政治について。今日は教育係の下で勉強をしなければいけない日だ。

それらを勉強するのは侯爵家に生まれた人間として、義務と言えるものなのは理解できる。理解できるが、セオは今、城にある地下牢の隅に立っていた。

勉強が嫌だから逃げ出したわけではない。教育係のレティシアに会いたくなかったからだ。レティシアはセオにとって何よりも、突然大声をあげる父よりも恐ろしい存在だった。

10になったばかりの自分より少し上である彼女は、天使のように可憐だと称されるほど整った容姿をしている。この容姿を気に入った父が、母の嫉妬を無視して自分と兄の教育係にレティシアを抜擢したくらいだ。

セオは勉強が嫌だから逃げ出したわけではない。彼女の隣で勉強をしたくなかったから逃げ出していたのだ。象牙のように白く、絹のように滑らかなレティシアの腕を見ながらする勉強は、今まで感じたことのない感情に振り回されるだけで、ろくに頭に入って来ないに決まってる。

しかもそのことを兄に相談したら「それは恋だ」と言って笑ってきたので、ますます複雑だった。変に意識してしまって、顔なんて合わせられるわけがない。

多分、城の廊下には困り果てたレティシアがいることだろう。分かってはいるが、会いたくない。

困るなら困ればいいのだ。自分だってこんなに困っているのだから

ら、少しは良いはずだ。

地下牢は寒かった。それでもここなら見付からないと思ってさきほどから隅で膝を抱えている。

その時だった。

「セオドア様」

ソプラノの澄んだ声が自分の名前を呼ぶ。びっくりと肩をひくつかせてしまった。

なにせ、この声は。

「レ、レ、レティシアッ!？」

慌てて振り返ると、やはりそこにはレティシアが立っていた。少し癖のある金色の髪ですら、彼女を鮮やかに装飾しているように見える。

「探しましたよ」

レティシアは目を細めて言う。呆れているようにも見えて、つい顔を背けてしまった。逃げ出したい、けれど嬉しい。この気持ちを隠す術なんて、自分は知らない。

「……探さなくても良かったのに」

なんとか不満を口にするレティシアは首を横に振り、セオの前に腰を屈めてくる。顔を上げたら目が合う。そんな距離だ。

セオは顔を背けたままだった。

「そうもいきませんよ、レイモンド様にお叱りを受けてしまいます。そんなに勉強、お嫌いですか？」

顔を合わせたら、出来の悪い弟を見るようなあの目をしているはずだ。セオは、レティシアのあの目が嫌いだった。

「別に……」

つつい素っ気なく当たってしまう。頑なな態度を見せているとレティシアがふっと笑った気がした。

「セオドア様、この地下牢に抜け道があるのはご存知ですか？」

そして嫌に明るい声で、今までの流れとは全く関係のないことを告げてくる。それが不思議で、セオはつつい顔をレティシアに向

けてしまった。

目が合って、勝ち誇ったような笑みを向けられて気付いた。これが目的だったのだ。

「……………ずるいぞ」

「なんとでもおっしゃって下さい。ですが、ここに抜け道があるのは本当なんです。レイモンド様から聞きました」

一度目が合ってしまうと、露骨に顔など反らせない。

レティシアはおかしそうに笑いながら続ける。

「もしもの時はこちらから逃げ出せと教えろと。ご自分で教えられるのに…………ユラング家は困った方ばかりですね」

呆れたように言い立ち上がる。そして一番奥の、物置と化した独房に入ってしまった。

「く、口が過ぎるぞ」

精一杯の意地を張りながらレティシアの後についていく。なんだからだで、ついていってしまった。

「申し訳ありません、私農村出でして」

だからなんだ。

そう続けたかったができなかった。独房に入ると手を伸ばせばレティシアに触れられそうなほど狭かったからだ。

「あ、こちらですね」

なんてことないように続けるレティシアが憎たらしい。彼女は簾の下に立て掛けてあった長剣を退けて続ける。長剣の下には一人が通れるほどの穴が存在していた。その穴は闇に吸い込まれてしまいうようなほど暗く、永遠に続いているのではないかと錯覚してしまいそうになる。

「こちらはカタコンベに繋がっているそうですよ」

「カタコンベ……………って地下墓地だろう？　なぜそんなところへの抜け道があるんだ？」

確かに、城から少し離れた場所にカタコンベがあるのは知っている。北部の共同墓地となっている場所だ。故人の威厳を尊重して人

が近付かないと聞いている。

「地下墓地は抜け道として都合がよいのだと思いますよ」

レティシアはそう言い、暗い穴に細長い足を入れ始めた。深くないようですすぐ足がついたようだったが、そのまま穴に飲み込まれてしまうのではないかとぎょっとしてしまった。セオの気持ちとは反対に、平然とした声が独房に聞こえてくる。

「このままカタコンベまで行きませんか？ 今日には課外授業にしましょう」

全身を穴に入れておきながら、レティシアが尋ねてくる。

「……僕が良い補佐役になれなかったらレティシアのせいにしてやる」

彼女の言葉に素直に頷くのはシャクだったので、皮肉混じりに返した。穴の中にいるレティシアの表情は当然見えない。返事はなかったので聞こえているのに無視をしているのかもしれない。レティシアは、そういう少女だ。

穴の中に入ると、洞窟が広がっていた。いつの間に用意していたのか、明かりはレティシアが持っているランタンだけで、視界が覚束ない。恥よりも恐怖が強くなり、自然とレティシアの服を掴んでいた。

「怖いですか？」

くすりと笑うレティシアの声が鼓膜を撥る。子供に言うような口調についてむっとしてしまった。

「う、うるさいな、大丈夫だ……っ！」

自分の声が、狭い洞窟にこだまする。

「ならいいのですが」

それ以降、レティシアは口を閉ざしてしまった。セオもなんとなく口を開くのをためらってしまい、カタコンベへと続く洞窟の中はレティシアと自分の靴音が響いているだけだった。

無性に落ち着かない気持ちは、レティシアの隣で机の前にいる時と同じ物がある。抜け道など、どうでもいいことに思えた。

「レティシア」

沈黙に耐え兼ねて彼女の名前を呼ぶ。特別な用事は、これといつてないというのに。

「はい？」

歩みを止めることなくレティシアはすぐに応えてくれた。

「こ、この抜け道……いつ使えばいいと思う？」

間を埋めるように、思ってもいないことを尋ねると、何事か考えるように間があいた。もしかすると、レティシアも場所を聞いただけだったかもしれない。

「そうですね、やはり城が危険な時でしょうか」

「城が危険って？」

カタコンベに到着する気配もないので聞き返す。城に10年近く住んでいるが、城が危ない時なんて一度もなかったように思う。それなのにこんな抜け道が存在しているなんて。

「賊に襲われたとか……火事もですし、反乱が起きた時など、セオドア様に命の危険がある時ですね。ああ、密会にも使えるかと」

最後だけ冗談混じりに告げてくる。からかわれているのかもしれない。服を掴む力を強くして抗議した。

「最後は置いといて……」

受け流すと、残念そうにレティシアが肩を竦める。次の言葉を言うまでに、やたらと時間がかかった。

「もし……もし僕が逃げる時は、レティシアも一緒に逃げるんだぞ。ここ、通してやるから」

ようやくの思いで言えた。城が危ないなら危ないのは自分だけではないはずだ。目の前にいるこの少女だって、城に住む人間。当然逃げるべきだ。

だから誘った。だから言ったのだ。

それなのに、頬が熱くなってしまったのはなぜだろうか。暗くて表情が見えないが、間が空いてしまったのが逆に恥ずかしい。

「……なんだ、嬉しくないのか？」

小さな声で続けると、レティシアの髪がふわりと横に揺れるのが分かった。

「いえ、有り難うございます」

その声はいつものレティシアにあるような、ふざけた調子は存在していなかった。反対に、真摯な響きが込められている。

「そう、ですね。セオドア様が立派な領主になる日まではおそばに居たいと思っております。まだまだ教えたいこともありますし。そのかわり給金上げて下さいよ」

真剣な口調で言っていたと思ったら、最後に冗談を言ってくる。

それが面白くなって、ぽつりと呟いた。

「顔で雇われたくせに偉そうだぞ……」

「なにか？」

セオの呟きを聞き逃すまいという勢いで聞き返される。

「いやっ。……僕は領を継がないはずなのによく言えるなって……」

勿論嘘だ、出まかせだ。レティシアはそれを察したのかは分からないが、何も言って来なかった。

暫くしてから、レティシアが声量を落とし告げてきた。

「私は、シモン様よりセオドア様の方が領主に向かれていると思うんです。シモン様は少々勝手が過ぎますからね。セオドア様は内気ではありますが、慎重なところがありますので」

自分が気にしていることを平然と言ってくれる。しかも兄のことも言うとは。

幾らでも文句は思い付くのに、口にできなかった。勝手かも知れないが嬉しかった。自分をこのように評価してくれていることも、このような秘密を持てたことも。

「……本当に、本当に側にいるんだよね？」

さきほどから自分は何を恥ずかしいことを言っているのだろう。レティシアにこんなことを言うのは最後にしなければ。じゃなければからかわれるに決まっている。

話しているうちにカタコンベに到着したようだった。レティシア

が腕を上げ前を照らす。

どうやら墓石が出口を塞いでいるらしい。ランタンの光が横顔を照らしている中、レティシアは嬉しそうに笑みを浮かべた。

「はい、お約束いたします」

けれど、レティシアとの約束はすぐに破れてしまった。その日を最後に、レティシアは城から姿を消してしまったからだ。

第3話「そんなことのために」(1)(後書き)

有り難うございました。

(2)

2

「いや、その！」

リリヤが口にした言葉のおかげで、子爵が何を疑っているか分かってしまった。セオは言い訳を探すべく、慌てて次の言葉を口にする。

「これは母の形見と言いますか」

疑いの眼差しを向けてくる子爵から目を逸らしながら続ける。口にした直後、まだ生きている母のことを思い複雑な心境になってしまった。

「……………本当ですか？」

間を空けてくるのが憎たらしい。何か言いたいのか、計りかねているだけなのか、それすら判断も付かなかった。

「本当ですけど……………、なにか？」

取り繕えるか分からないが、貴族らしさを出そうと悠然と振る舞うのを忘れない。

セオがその言葉を口にした時、子爵がおかしそうに笑うのが聞こえた。

「マーガレット様はまだご存命ですが？ 勝手に殺すのは感心しませんか」

先程よりも柔らかくなった声が母の名前を口にした時、セオは目の前が白くなってしまった。子爵が何を言っているか分からなかった。なぜ母の名前を知っているのか、すぐに理解できなかった。

「えー……………」

背後から諦めに似た、けれど感心しきったアレックスの声が上がる。

る。アレックスも子爵が自分の母親の名前を知っているという状況を理解したようだ。

それは、つまり。

「メルロー、子爵……」

なんと続けていいか分からなかった。子爵はふと目を細めるだけで何も続けようとはしない。

子爵の青い瞳と目が合うが、何を考えているかまでは読めなかった。

「お久しぶりです、セオドア様」

自分の名前を口にされた時、このまま呼吸が止まってしまうのではないかと思った。

なぜばれてしまったのだろうか。フラヴィですら悩んだはずなのに。

「……どうして」

渴ききった喉からようやく単語を発せられた。

「どうして、子爵は、僕を」

自分は死んだことになっていたのではなかっただろうか。確かに顔を隠していなかった自分にも落ち度はあるかもしれないが、そうだとでもばれるのが早過ぎるし、子爵は些か冷静すぎるようにも思える。まるで最初から自分が生きていたことを知っていたかのようだ。

「フラヴィがうるさかったもので」

なんてことのないように続けられた。背後からフラヴィの、噓っ！？ という声が耳を突き刺してくる。

「フラヴィ……っ！」

振り返り彼女を睨みつけると、フラヴィは眉根を下げた。

「……ごめーん」

叱られた子犬がする時のようにしゅんとしている幼なじみを見ると、それ以上何も言えなくなってしまった。アレックスはアレックスで、俯いたまま何も言って来ない。

「ごめんって」

フラヴィに文句の一つでも言おうと口にした時、子爵の声をそれを遮った。

「それに、私は……セオドア様が生きていると薄々感づいておりましてが」

子爵が何を言っているのか理解できなかった。理解したくなかったのかもしれない。

「さもなくば子爵の方に顔を向けると、子爵はしみじみと頷く。

「そもそも何らかの理由がなければ、子爵風情の私が、貴方を匿った直後に南部の管轄を任されたのですよ？ 何かあると思いますよ、貴方の死体も上がりませんでしたし」

ゆっくりと、一言一言丁寧に続けられる。

確かに、急な出世には何らかの裏があると考えてもおかしくない。自分に関わるいざこざに巻き込まれた人間なら、口止めなのではと疑って当然だ。

正論すぎて何も言えない。

「とは言え薄々ですから、ここで会えたのは意外でしたが。……貴方は私を恨んでいるとばかり思っておりましてから、館など、近寄りたくもないだろうと」

昔を思い出しているのか目を細め、苦々しく言われる。セオも昔を思い出し、やるせない気持ちになってしまった。

自分が子爵を恨むとしたら、父親の手から逃れて子爵の館に逃げ込んだ時のことしかないだろう。使用人の女性が自分を売った、あの時しか。

確かに10年という長い時間の中で、子爵やフラヴィのことを恨んだことがない、と言えば嘘になる。もし子爵の館を頼らなければ何か違っていたはずだとも思った。

けれど、長い時間を過ごす内にそれは間違いなのだと気付いた。逆恨みにもほどがあると。それにあの使用人には、やむを得ない事情があったはずだ。その中に自分のような存在が迷い込んだら、あ

のような行動を取ってしまうだろう。もし自分が彼女と同じ立場なら、いつまでたっても少女のような大切な母を守るために、同じ行動をするはずだ。

それなのに　子爵は、自分を恨んでいると勘違いをしている。自分が、10年前の少年だと。

セオはゆつくりと、けれど確かに首を横に振る。

「子爵、それは子爵の勘違いです。僕は子爵を……恨んでなんか、いません」

目線を合わせて言うと、子爵の瞳にある光が疑わしげに揺れる。信じられないのも当然なのだろう。

「いえ、そうではなくて！」

慌てて言い直す。

次は言葉を選びながら、慎重に。

「確かに、子爵のことを恨んだこともありました。それは事実です。ですが、そう思うのは僕の逆恨みに過ぎないと分かったんです。ですから、僕は子爵を恨みたくありませんし……子爵も僕が恨んでいるだなんて、そんな悲しいことを思っただけじゃないんです」

何度も言葉に悩みながら、それでも必死に想いを伝える。

自分の想いが子爵に通じたかは分からない。言葉を間違えてはいないかと、背中にひんやりとした物を感じたくらいだった。子爵はじつと、心の奥を見透かすかのように鋭い視線を向けてきた。気圧されないようにと、うろたえることなく見つめ返す。

どれほどの間そうしていたか分からない。セオがそう感じていただけで、実際はそんなに長くはなかったかもしれない。

何も反応しない子爵を見て、通じなかったと諦めていると、子爵の瞳がきつく閉じられるのが分かった。それは同時に、止まった時間が解れたようにも思える。

「……子爵？」

何かを堪えているかのようにも見える子爵が不自然に思えて、様子を窺うように声をかけた。やはり自分は何かまずいことを言い、

怒らせるような真似をしてしまったのではないだろうか。

内心焦りながらも次の言葉を探し始めると、ようやく子爵が口を開いた。

「セオドア様はお変わりありませんね……本当、お変わりなく……有り難う、ございます」

そう口にした子爵の表情は、長年の思いから解き放たれたような清々しさを湛えている。目尻に白い手袋を嵌めた手を当てている辺り、涙を浮かべているのかもしれない。その様子を見てみると、自分まで泣いてしまいそうになる。

「……し、子爵こそお変わりなく」

気を抜けば声が震えてしまいそうになるのを、堪えながら返事をした時だった。セオの頬に、ひんやりとしたものが触れたのは。

「あつ、雨だわ」

セオがそのことを口にする前に反応したのはフラヴィだった。

「やだっ、濡れちゃう前にうちに入りましょ！」

本降りを警戒して声をかけてくる。自分を初め、ここにいる人間に言っているようだった。

「僕は……」

中途半端に言葉を口にして振り返る。

これ以上迷惑をかける気はない。雨宿りなんてもつてのほかだ。そもそも自分がこの館を訪れたのも、違う目的があった気がする。

それらの意味を込めてアレックスの方を振り返ると、フラヴィがアレックスの腕を掴んでいるのが映る。

「ねーねー、私濡れたくないから早くうち入ろーよ？」

「俺もそうさせて頂きたいんですけど、若様が頷かれるかどうか……」

そのような話を交わしているのがこちらまで聞こえてくる。この間にも雨足はどんどん強くなっていった。

「良く分かっているじゃないか」

会話に混じり、相槌を打つ。言いながらも腕を持ち上げて、頬に

付着した水滴を拭った。

「ねえ、テッド。貴方が乗ってきた馬車、屋根ないのよ。それなのに？」

アレックスの腕を引っ張ることをやめようとせず、フラヴィが不満げに続けてくる。

確かに、アレックスが乗る馬車には屋根がない。本格的に降り出してきた雨では、この馬車で帰るにしても濡れるのは間違いないだろう。

ユウラングは寒い。初夏と言えどみな長袖なほどだ。これから夜が近付くにつれ一段と冷えるだろう。幾ら塔が近いとは言え、屋根のない馬車で帰るのは少々無謀に思える。

「若様、俺もこんな時に運転したくありません。馬も嫌がりますよ」
そう口にするアレックスは、どこか鬼気迫る物すらある。どうするべきなのかと考えていると、子爵もそれに頷くのが分かった。

「そうだとも、うちに来るといい。前みたいなことはないと約束しよう」

(2) (後書き)

有り難うございました。

子爵に名前をあげればよかった。

(3)

3

反応に困ってしまった。セオだって風邪は引きたくない。

ユウラングよりもっと南にある領では疫病が流行っている、と昔聞いたのを覚えている。まだアキネスにも来ていない疫病だが、アニーが「なにが起こるか分からない世の中ですから風邪だろうと気をつけてください」と口をすっぱくして言ってきた。

だからか、セオは体調に関しては敏感な方だ。それにアレックスが運転したくないのなら話は別だ。歩いて帰るのはそれこそ遠慮したい。

自分の存在が子爵にばれている以上、ここは素直に好意に甘えてもいいのかもしれない。そう思いセオは首を縦に振った。

「雨宿りだけなら、お言葉に甘えさせて頂きます」

セオが頷くと子爵はうんうんと嬉しそうに笑っていた。

慣れ親しんだ館に向かって歩を進める。リリヤは雨が降るのが分かっていたかのように、既に扉の前にいた。幽霊が雨に濡れるわけがないと思うのだが、不思議な話だ。

リリヤの隣には、走ってきたらしく僅かに息を切らしているフラヴィの姿があった。幽霊と並んでいるのにフラヴィが気付いた様子はない。二人とも見えるセオからするとなぜか滑稽な劇を見せられている気になってしまう。

「テッド早くー！」

「だから叫ぶなよ……！　って」

雨も本降りになってきたというのに、足を止めてしまった。フラヴィの隣にアレックスの姿がないからだ。先ほどまで一緒だったと思うのだが、どうしたのだろう。

「アレックス」

その時、後方から子爵の声が聞こえてきた。どうしたのかと振り返ると、置いてきた馬車へ向かうアレックスを呼び止めている子爵の姿があった。

「……は……はい？」

足を止め、雨に濡れるのも構わずアレックスが反応する。しかしその表情は使用人が主に見せるそれとは違っていた。えらいものに見付かってしまったとばかりに嫌そうな、それでいて緊張しきった表情を浮かべているアレックスを初めて見たような気がする。

「私の許可なしに馬車を小屋に止める気か？ ……育ちが知れるな」
誰が聞いても嫌みだと分かるほど、なつとりした口調で子爵が続ける。

「え、そのっ。……申し訳ありません、フラヴィ様はいいと言われましたから、つい」

何か言いたそうな表情を浮かべながらも頭を下げるアレックスを見てみると、雨に降られているのも忘れてしまいそうになる。子爵とアレックス、二人の関係がセオには分からないからだ。

「そういう問題でもないと思うがな？」

「……申し訳ありません。では改めてお借りしても宜しいでしょうか」

ここまで畏まるアレックスは珍しい。どうしたのかと尋ねようとすると、背後から少女の声が聞こえてくる。

「止めておけ止めておけ。あんなもの、好き好んで関わるものじゃない。そもそもあの男がやかましい女の声を聞けたのも、間抜け面のせいだと思うぞ」

振り返らなくても分かる。この声や喋り方は、リリヤだ。いつの間にかこちらへ来たのだろうか。それになにを言っているのだろうか。

「……どういう意味だ？」

リリヤだと分かっているからこそ、誰にも聞こえぬよう小声で聞き返す。

「お前も父親になってみれば分かるさ」

含み笑いをされながら言われるが、自分が父親になるなど考えたことがない。釈然としない回答に首を傾げていると、風が吹いてきた。すっかり濡れてしまった身体には、それすら堪えるものがある。アレックス達から視線を外し肩を縮こませると、それを見ていたリリヤが呆れたように溜め息をつく。

「おい、とつとと入ったらどうだ？ 風邪引くぞ」

「言われなくても入るところだよ」

分かっていることを指摘されるのは複雑だ。つつい苛立ちを滲ませながら返し、館の方に向かう。リリヤとすれ違った際、当然のように彼女は濡れていなかったのが目に入った。なりたくはないが、幽霊というのはある意味では羨ましい存在なのかもしれない。

玄関についたものの、フラヴィの姿はなかった。視線を上を持ち上げると、扉についているベルが微かに揺れているのが見える。もう中に入ったのかもしれない。

扉に手をかけた。中に入ったら、まずはなにか身体を拭くものを借りよう。

ミチツという木材が物に擦れる音を立てて中に入る。今、南部ではメルロー家が一番権力があるだろう。当然内装も豪華だと思っていたのだが、意外なことになにも置かれていなかった。10年前の方が豪華だったと思えるほどだ。廊下の突き当たりに立派な時計があるだけで、他には目立った調度品もない。

髪から滴り落ちる雫も忘れて、意外な光景に目を奪われていると、奥からフラヴィの声が聞こえてきた。

「あ、驚いたー？ 子供のころの方が裕福だったよね、ユユラングもうちも」

声が聞こえてきた方に振り返ると、居間から顔を出して話し掛けてくるフラヴィと目が合った。

「着替えは今用意させるわ。それまで紅茶でも飲んであったまうてよ」

先ほどまで着ていたエプロンドレスを脱いで、シンプルなワンピース

―スを着ている辺り、もう着替えたようだ。そしてこちらにタオルを差し出してくる。

セオは行動の早い幼なじみの方に向かい、タオルを受け取り首を傾げた。

「君の家はそうかもしれないけど、ユウラングもだつて？」

幽閉されていた間、ユウラングが傾いているという話は誰からも聞いたことがない。それぞれプライドや遠慮から言えなかったのかもしれないが、生活していく上で支障が出たことはなかったというのに。

「ひつどーい！ 相変わらず変なところで失礼なんだから。うちはなけなしの財産を民にあげてるだけですー」

誰もいない居間に入る前に、むくれているフラヴィとすれ違う。他意はなかったが怒られてしまった。まさかメルローがそこまで領民を大切にしていたとは思わなかった。

「ごっつ、ごめん……それで、ユウラングも？」

簡単に謝り、準備されていた椅子に腰を下ろす。セオがそうするのを見てからフラヴィも着席する。テーブルクロスの上には湯気を立てているティーカップが三つ並んでいた。

「なあ、この家は客に菓子も出せないぐらい金をばらまいてるのか？ それとも、お前だから渋っているのか？ カップの数も変だし」セオの隣でまじまじとカップを眺めていたリリヤが呟く。一言言っただけでやりたかったが、フラヴィが居る以上それも出来ない。

「あら、知らないの？ ユウラングはここ最近不作続きなのよ、9年前は飢饉寸前とまで言われたんだから」

そう語るフラヴィの表情はどこか誇らしげだ。人が知らない情報物を教えるのが嬉しいようだ。

とは言え、セオにはそれらは初耳だった。

「不作だつて？ それに、飢饉がどうした？」

「え、本当に知らないの？ ……あなた、どうい生活送ってるのよ」

話の合間にどうぞと紅茶を勧められた。温かいティーカップを口元に運びながら、どう説明するべきなのかを考える。どんな、と言われても昼過ぎに起きて一人でトランプ遊びに耽り、たまにアレックスと雑談をする日々だった。そこにフラヴィーが納得できるような回答はないように思えた。

「うーん、ちよつと自堕落だったかな……。不作とか飢饉とか、そんなのは関係ない生活だったし」

食事は三食アニーが用意してくれた。シードルだって好きな時に飲めた。フラヴィーの言葉が事実なら、理由は分からないが自分は優先的に食物を回されていたことになる。

「ふうん……。結構良い暮らししてるのね、意外。囚人みたいな生活してるのかと思った。じゃあなんで幽閉なんてされてるのよ？アレックスも知らないみたいだし」

フラヴィーがストレートに尋ねてきたのは、セオが再び紅茶を口に含んでいる時だった。こうもストレートな質問がくるとは思わなくて、思わずむせてしまう。

「こほつ……」

「あ、もしかして聞いちゃいけなかった？ ごめん」

フラヴィーが申し訳なさそうに告げてくる。喉の調子を整えている間、リリヤが得体の知れない物でも見るような視線をフラヴィーに向けていたのが印象的だった。

「い、いや……。そんなことないけど、ごめん。幽閉された理由は、悪いけど僕にも分からないんだよ」

落ち着いたところで、改めてティーカップを持ち直し答える。菓子が無いのは残念だったが、メルロー家にも事情があるようなので仕方ない。

フラヴィーがセオの言葉を聞き信じられないものを見たばかりに、目を丸められる。

「え、ちよつとテッド、自分のことでしょう!？」

「……怒られても知らないものは知らないんだよ。それに、君は知

らない方が良い話だと思っけど？」

言い終わってから紅茶を口を含む。シードルばかり飲む自分にとって、紅茶のまろやかな口当たりは新鮮なものがあつた。

「そうかもしれないけど、自分が10年も幽閉されている理由くらい知りたいって思わない？」

セオに視線を向けながら、言葉に困つたように眉を顰め続けられる。どこか困惑しているようにも見えた。

「分からないままでいいよ。父上が話すとは思えないんだ」

溜め息混じりに言い目を伏せた。

解放されたいとは思つたが、理由を知りたいとは思わなくなっている。父だつて教えてくれることもないだろう。諦めていた。

「そんなあ……」

肩を落とし残念そうに自分を見てくるフラヴィを前にすると、何時間か前もこのような表情を見たような気分 to 襲われる。とは言え、それがいつだったかは思い出せなかった。

「変わってないって思ってたけど……テッド、ちょっとおかしくなつたんじゃない。慣れすぎてるっていうか、人として大事な部分が死んでるわ」

いつもより覇気がないとは言え、あまりにも直接的な言葉を投げ掛けてくるので、さすがに頭にきてしまった。

「……あのさあ、そこまで君に言われたくないんだけど。昔から君ははっきり言う人だったけど、言つていいことと悪いことがあるだろう？」

(3) (後書き)

有り難うございました。

11/22 修正

先程よりも声を低くして言うと、フラヴィは負けじと睨み返してくる。

「なによ、私はなんにも間違ったことは言っていないわ。それなのに言い過ぎるもなにもないわよ！」

フラヴィも頭に血が上っているのかもしれない。売り言葉に買い言葉といった様子で返してくる。自分はなんにも間違えていない、その様子がますます苛立ちを煽った。

「だけど間違っただけならなにを言ってもいいのか？ それに、君に僕の気持ちに分かるわけないだろう！」

声を張り上げて言うと、フラヴィがこちらに向けていた視線が一層厳しくなる。子供の頃よくした喧嘩のように、このまま口論になるのだと思った。感情的になるなんて、図星を指されたに違いないのだから。

思った通りフラヴィは口を開く。しかし、その言葉は発せられることはなかった。机の上に乗っていたはずのティーポットが、地面に落ちパリンと音を立てて割れたからだ。

「きゃ！」

居間に甲高い声が響き渡る。突然の事に気を削がれつつ視線をポットへと向けると、そこにはリリヤが立っていた。彼女の赤い瞳と目が合い、小さな、けれどはっきりとした声で言われる。

「うるさい、喚くな。お前は子供か」

子供を叱るようなその声に、反射的に肩をびくつかせてしまう。反論しようにもフラヴィがいる。唇を噛み締めるしかなかった。それに、リリヤの指摘は正しいように思えた。

「……ちよっとちよっと、ぼけっと突っ立っていないで拭くの手伝って

よね！」

気を削がれたのはフラヴィも同じだったようだ。いつの間に用意したのか、雑巾を二枚持つて水溜まりを拭っている。

テキパキとした幼なじみを見て微かに俯く。気の回る幼なじみが眩しく見えたのもあるが、リリヤの言葉を思い返していたのもある。

「……すまない、僕が悪かった」

顔を上げ、リリヤを見ながら呟く。セオがいる位置からはリリヤの表情は見えなかったが、仕方ない物を見たときにする呆れきった溜め息が返ってきた。

「ん？ そんなのいいから早く手伝ってよ！ それにしても不思議……私そんなに端に置いたかしら」

リリヤに向かっての言葉を勘違いしたフラヴィが首を傾げて、こちらに雑巾を差し出してくる。どうやら拭け、と言うことらしい。

「妖精でもいたんだよ。私の前で喧嘩するなってさ」

雑巾を受け取りながら言う。あのタイミングはどう考えても妖精ではなく幽霊だが、似たようなものだろう。まさかりリリヤがこちら側に介入できるとは思ってもいなかった。

水溜まりの中に雑巾を放り水分を染み込ませていると、誰かが扉を開け部屋の中に入って来た。誰かを確認する前に、面食らったようなアレックスの声が耳に届いてくる。

「お邪魔します、……ってなにやってるんですか二人で！」

「あらアレックスじゃない。なにして、紅茶零したから拭いてるんだけど？」

「なら俺がやりますって！ 若様もそんなことして床が拭けるわけないでしょうに……！」

慌ててこちら側に回り込んだアレックスが、困り果てた声を上げていた。フラヴィから雑巾を受け取り、手慣れた動きでまずは割れたポットを片付けていく。

「え。床ってこう拭くんじゃないのか？」

アレックスの邪魔にならないように手を退けて尋ねた。するとア

レックスは、疲れたような表情を浮かべ自分の失敗を嘆くように零す。

「……侯爵と子爵に一般的なやり方を望んだ俺が間違えていました、お気になさらず」

それつきりアレックスはなにも言おうとしなかった。アレックスの手により、ティーポットの破片は見る見る内に片付けられていく。「おー、間抜け面も言うじゃないか」

セオの隣でアレックスの手際をじっと眺めていたリリヤが、ウンウンと嬉しそうに同意を示す。なにがそんなに嬉しいのか自分にはまるで分からない。フラヴィもアレックスの言葉の意味が分からないらしく、思わず顔を見合わせてしまった。しかし答えは出ない。

そうしている内に思い出したようにフラヴィが口を開く。

「あ、そういえば父さんは？」

フラヴィの疑問も最もだ。ここにアレックスがいて子爵がいないのはおかしい。

「子爵は自室に行かれたかと」

「えー、なんで？ 私父さんに嫌がらせしたくてわざとカップの数減らしたのにい」

フラヴィが面白くなさそうに肩を下ろし溜め息をつく。片付け終わった雑巾を持ち、立ち上がったアレックスの眉が顰められる。

「頼みを聞いて頂いているんです。それに……なんでそんな陰湿な真似されるんですか……」

「だってアレックスを虐めるんだもの」

悪びれた様子のないフラヴィを横にセオも立ち上がる。子爵と話せるだろうと思っていただけに、自室に行ってしまったとは驚きだ。「ね、頼みってなに？」

二人の話に割って入るには気が引けて椅子に腰を下ろし、二人を眺めていた。雑巾を片付けに廊下に半身を出していたアレックスが、顔を戻し複雑そうに呟く。

「ええ、まあちよつと。あつ、フラヴィ様、あの……」

言葉を濁していたが、逃げ道を思い付いたとばかりにアレックスが何事かをフラヴィに耳打ちしていた。

「……姉さんってアニーさんよね？ アニーさん、うちに来るの？」
アレックスはうまく声を潜めたようだが、フラヴィは声を潜めることなく返す。

ここで聞くとは思っていなかった名前に、思わず顔を上げてしまった。顔を上げると、アレックスと目が合いすぐに逸らされた気がした。

「は、はい、まあ……。それより若様に早く着替えを、と思うのですが」

「あ、それもそうね。ちょっと聞いてくる！」

忘れてた、とばかりに焦った声を上げフラヴィが扉へと向かう。
「ちょっと待ってて、ごめん」

フラヴィは扉から出る前に、こちらに顔を向け申し訳なさそうに謝ってくる。気にするなと片手を持ち上げると、フラヴィは部屋から出ていった。パタン、と音を立てて扉が閉まり部屋にはセオとアレックス　とりりやだけになった。

アレックスはどこか気まずそうで、座ろうともせずただ壁際に立っている。その横顔を眺めていると、今までなあなあになっていた疑問の数々が思い出されるようだった。

その一つとして。

「……なあ。アニーがどうしたって？」

アレックスとの間にある沈黙を破るように尋ねる。セオが口を開くと、アレックスは驚きに肩をひくつかせ自分に視線を向けてきたが、目が合ったとは言え、アレックスが口を開く気配はない。

「アニーがどうした？ フラヴィとの話から察すると、アニーがここに来るように聞こえたけど。どうしてだ？」

もう一度尋ねる。フラヴィの名前を出した時、アレックスが弱り切った表情を浮かべていたのが印象的だった。

メルローにきてから今まで、セオはフラヴィの明け透けな性格に

よくも悪くも多大な迷惑を被ったのだから、恋人であるアレックスはもつと迷惑を被っているのかもしれない。フラヴィがセオの存在を知っていたのも、アレックスを尾行したからだった気がする。

「あ、あの、フラヴィ様には悪気なんてありませんからね！そこは勘違いされないでくださいよ。本当は優しい方で」

「知っているよ。僕は彼女と幼なじみなんだから。それで僕はアニーのことを聞いているんだけど？」

このような状況に立たされてもフラヴィを気遣うアレックスを見ていると、笑みが零れ落ちそうになる。

しかし、今は笑ってはいけない。アニーのことを聞かねばならないのだ。こちらがある程度事情を把握しているからか、アレックスは諦めに似た表情を浮かべていた。話す決意が固まったようだ。

机の上に乗せた手を組み直す。リリヤも興味があるらしく、赤い瞳をアレックスに向けている。

「……姉さんが北部に行ったのはお話ししましたよね？ その後姉さんとはこちらで落ち合わせる予定でした。だから俺、あんな嘘をついてまで若様をこちらに連れて来たくて……。申し訳ありませんでした！」

アレックスはこれ以上話をしたくないのか、それ以上に一つ話そうとはせずに頭を下げてくる。ある程度の謎は明かされたとは言え、まだ肝心な部分が明かされていない。

暫くしてから、口を開いた。

「どうしてだ？ どうしてそんな回りくどいことをする？ メルロ一家になにかあるのか？ アニーとお前は一体」

「うわっ！」

アレックスを問い詰めようとしたができなかった。話途中で、バン！と勢い良く扉が開かれたからだ。突然のことに、セオよりもアレックスの方が驚いていた。開放たれた扉からは、今にも鼻歌を歌いだしそうなフラヴィが入って来る。

「テッドー！ 準備できたって！……あら？もしかして私お邪

魔？
L

(4) (後書き)

有り難うございました。

フラヴィの登場により、張り詰めていた空気が一瞬で緩んだ気がした。アレックスは見るからに安堵の表情を浮かべている。

「いや、邪魔じゃないよ」

そんなことはない、と首を横に振る。邪魔をしてしまったかと懸念していたフラヴィが、ほっと息を吐くのが聞こえた。

「なら良かったー。でね、テッド。着替えの準備できたから着替えなよ。私の部屋、覚えてる？ あそこに着替え用意したから使って」
フラヴィはテキパキとした口調で言いアレックスに近寄る。

アレックスも着替えるべきだと振り返ると、アレックスはもう着替えていたらしく首を横に振られた。赤のジャケットをそのまま着ていただけに気付かなかった。

「君の部屋って……いいのか？」
聞き返す。

いくら幼なじみといえど未婚女性の部屋を使うのはどうなのだろう。そもそも一人で館をうろついていいものか。

「いいわよ。だって他の部屋に使用人がいるもの。貴方だって使用人には会いたくないでしょ？」

最もな言葉に反論できなかった。セオは首を縦に振って頷く。しかしメルロー家の使用人達は突然の来客に窮屈な思いをしていそうで、申し訳ない気持ちになる。自然と苦笑いを浮かべてしまった。

「……まあね。あ、なんとなくしか覚えていないんだけど、君の部屋ってどこだっけ？」

「えつとね、この部屋から右をずっと歩いていくと突き当たりにぶつかるでしょう。そこにある部屋よ。多分すぐに分かるわ」

身振り手振り加えながらフラヴィが部屋の位置を説明してくれた。その説明を聞いている内になんとなくではあるが、フラヴィの部屋の位置を思い出してくる。子供のころよく遊んだフラヴィの部屋は、確かに一階の突き当たりにあった。窓の外に立派な木があった気がする。

「ああ、思い出したよ。有り難う。脱いだ服はどうしたら？」

笑みを浮かべて返し出入口に向かって歩く。その時室内にリリヤの姿がないのが気になった。

先程ポットの片付けをしてからというもののリリヤの姿を見ていない。セオに用があるのは確かなようなので勝手に外に行くこともないだろう。すると、館内の散策に出かけたと考えるのが妥当だ。

「適当に洗うわ。だから持ってきてくれる？」

今度こそ扉を開き、頷いた。

「分かった」

「いつてらっしゃい。……ねえアレックスー」

部屋を出る前、フラヴィがアレックスの名前を呼ぶのが聞こえたので、二人の会話の邪魔にならぬよう静かに扉を閉める。

廊下に出て一息ついた。フラヴィが言っていた通り、館の中に人の姿はない。彼らには悪いことをした。はあと息を吐いてからセオは目的地に向かう。

内装は昔と違うが、間取りは同じだ。フラヴィの案内に頼ることなく、すぐ突き当たりに行き着く。横にある扉の前にかかっているタペストリーは10年前にはなかったが、ここに間違いないだろう。幼なじみの部屋で雨に濡れた服を着替える。たったこれだけのことなのに、なぜか後ろめたい気持ちに襲われた。周囲を見渡して誰も見ていないことを確認してから、セオは扉に手をかけて中に入る。

「……あつ……！？」

声を発するほど驚いた。柔らかなベッドの横に、物珍しそうに部屋にある置物を眺めている銀髪の幽霊がいたからだ。

「……うん？　なんだ、子供みたいなセオドアか」

リリヤはちらりとこちらを見てから、槍を持っている褐色の肌をした人形に視線を戻してしまった。

「一言余計だよ、リリヤ」

先程のことを言っているのだろうか。そうだととしても余計だ。

部屋の真ん中にわざとらしく置かれた木製の椅子、その上に綺麗に置かれた着替えが乗っている。どうやらこれに着替えるというところのようだ。

「なあなあ、これいくらしたと思う？」

セオの言葉を受け流し、リリヤは声を弾ませて聞いてくる。これ、とはリリヤが見ていた人形のことだろう。上着を脱ぎながら視線を人形に向ける。

褐色の肌をした人形は珍しい。造りだって繊細且つ精巧だ。それなりの金額だったのは確かだろう。

「さあ……。金貨が一杯出たんじゃない。そもそもいきなり金額についての話を振ってくるってどうなんだ。もっと違う話があるだろう？」

セオは一人で着替えたことがあまりない。ボタンをかけるのに手こずってしまった。

「違う話か……。一杯あるぞ。お前が革命する気があるのか、とか。

ああ、ただが一番気になるのはな」

リリヤが立ち上がった気配がする。ボタンをかけることに集中していたのでよく見ていなかったが、そのようだ。

「お前。お前なんでテッドって呼ばれてるんだ？」

「え？」

予想外の言葉につい顔を上げる。

向かいには、自分の返答を待ち侘びているリリヤの姿があった。「なんで、って言われても……。セオドアの愛称だからだろう。父上

も母上も、……兄上もみんな僕をそう呼んでた。幽霊は人より物を知っているんじゃないのか？ 知らなかったのか」

少し意地の悪い言い方をしてしまった。リリヤは面白くなさそうに顔を背けて唇を尖らせる。

「……なんだ、つまらない。それだけか？」

「なんだ、つて。しかも無視するんだね」

小さく鼻を鳴らす。出会った時にしてくれた「色々な物を見た」という話ははったりだったのではないかと疑いたくなる。

「……僕としては子供扱いされているみたいで苦手なだけだね、テッド呼びは。フラヴィはお決まりみたいなものだから許せるけど

—

いつまでたってもボタンに手間取っている自分を見て、リリヤが話を遮って聞いてくる。自分の話は両方無視をするらしい。

「お前、まさかとは思うがボタンが閉められないとか言う気か？」

「……そのまさかかもしれない。悔しいけど」

胸元のボタンを開けたまま返す。これを難なくこなせる人は人間じゃないとまで思えた。

「……床は拭けない、ボタンはかけられない。お前、大丈夫か？」

「僕の基準でなら大丈夫だけど。……つて！？」

馬鹿にされている気がしたのでこちらもつつけんどんに返して驚いた。リリヤの髪がすぐ側にあったからだ。

飾り一つない、ウェーブがかった銀色の髪。シンプルなそれが放つ妖艶さすら感じる輝きは、見ているだけであちらの世界の者に心を奪われてしまいそんな錯覚を覚えてしまう。

そこで気が付いた。リリヤは元より幽霊だ。

思わず苦笑いがこぼれ落ちた。そしてまた違う疑問が頭をよぎる。なぜこんな近くに？ と言う前に理由を察した。先程よりも首周りが窮屈になったからだ。

「……リリヤ」

リリヤがボタンをかけてくれたというのはすぐに分かった。しか

しセオは、それに対してどのような反応を示していいのかまるで分からない。もごもごと口を動かして非難に似た声を上げることしかできなかった。

「ん……、なんだその不満そうな声は。手伝ってやったんだぞ、お前は感謝の言葉も言えないのか」

視界から銀色の髪が遠ざかっていく。それと同時に呆れ返った声で悪態を吐かれた。

「……、君は物に触れるんだな。さっきのポットもそうだったし」

「そうかそうか、それがお前なりの感謝の言葉か」

どこかぼかんとしたまま礼も忘れて頭に浮かんだことを尋ねると、不満そうなりリヤの声が返ってくる。仁王立ちをしてこちらを睨みつけてくる姿は迫力があつた。

「は？ そんなわけないだろう」

胸元に手を伸ばしボタンのかかった服を触る。まだ違和感が残るのは気のせいではないはずだ。

「なら礼を言ったらどうだ？ 口があれば猿でも言えるんだから」

(5) (後書き)

有り難うございました。

(6)

6

リリヤが折れることはなさそうだった。なんとしてもセオにお礼を言わせたいらしく、少し離れた場所に立ったまま動こうとしない。その様子はまるで言うことを聞かない息子を叱り付けている母親のようだった。

「……」

なにも言えなかった。

自分はこの目を知っている。具体的なことは何一つ思い出せないが、直感がそう告げていた。

気圧され、一歩後退する。握り締めた手がじとりと汗ばむのが分かった。

「……有り難う、リリヤ。助かったよ」

薄く口を開いて嫌々呟いた。なぜか素直に謝りなくなかったのだ。しかしリリヤはそれで満足したらしい。先程まで浮かべていた真剣な表情はなりを潜め、今では春に咲く花のように愛くるしい笑顔を向けてくる。

「そうだ、それでいい。なんだ、言えるじゃないか」

そのまま鼻歌でも歌いだしてしまいそうなほど機嫌のいいリリヤを横に、セオは中途半端に思い出したなにかに気を向ける。

あの目は、いつ見たのだろう？

思い出してできなかった。セオの思考を妨げるように、部屋に少年の呆れきった声が響いたからだ。

「……強要はいけませんよ、リリヤさん」

驚きに肩をびくつかせる。

なぜという思いでいっぱいだった。この部屋には自分とリリヤしかないはずだ。アレックスが様子を見にきたというわけでもなさ

そうだ。この声はアレックスのものではない。

周囲を見渡し部屋の隅に立っていた少年を見た時、妙に納得してしまった。リリヤが着ているローブと似たようなローブを着て、深く被ったフードから僅かに覗く髪は銀色をしている。前髪が長いので瞳の色は分らないが、恐らく赤いはずだ。

「幽霊？」

セオが呟くと同時にリリヤの嫌そうな声が、背中から聞こえてくる。いつの間に移動したのか不思議だった。

「……トウーレ、帰ってもいいんだぞ」

「来たばかりの人間にそんなことを言わないでいただきたいのですが」

「お前は幽霊だろう！」

いまいち事態が飲み込めない。セオは何度か瞬き、視線をリリヤとトウーレと呼ばれた少年に交互に向ける。

「ゆ、幽霊にも知り合いとかあるのか？」

なにかから聞いていいか分からず変なことを聞いてしまった。慌てて聞き直す。

「いや、そうじゃないな……。誰だ、お前。リリヤの知り合いなのか。どうして喋れるんだ、幽霊は喋れないはずだろ」

トウーレは一拍間を開けてから目を細めて顔を上げる。

トウーレは思っていたよりも若かった。幽霊が人間と同じ歳の数え方をするなら、トウーレは十七もいってないだろう。

リリヤと同じ血のように赤い瞳と目が細められる。

「申し遅れました。僕はトウーレと申します。リリヤさんとは同じ幽霊で、兄弟みたいなものです。だから僕は喋れます。まあ、リリヤさんには嫌われているみたいですけどね」

「そうだ、帰れ帰れ！ お前がいるとろくなことになるじゃないじゃないかっ」

セオの背中に隠れたリリヤの声が部屋に響く。猫がふうふうと威嚇しているさまを彷彿させ、セオは瞬く。

「リリヤさんは冷たいですね……昨日は素直に僕の頼みを聞いてくれたのですが」

幽霊なら勝手に侵入してきたのをあれこれ言えない。そしてこちらの命に干渉してくることも恐らくないだろう。そのローブの下に短剣を隠していたら別だろうが、フラヴィの部屋に命を奪うほどのものはなかったと思う。それにリリヤはこちらの物に触れるみたいだが、トゥーレもそうなのかは分からない。

「借りくらい返すに決まってる！」

リリヤの声を聞きながら、緊張で強張ってしまった表情をごまかすように深く溜息をつく。

「……トゥーレ、僕に用でも？ それともリリヤか？」

トゥーレは一度こちらを見てからリリヤに視線を向ける。そして預言者のように浮世離れした表情を浮かべ、こちらに指を向けてくる。

「貴方にですよ、セオドア様」

眉に皺が寄るのが分かる。

そういえばリリヤも自分の名前を知っていた。一部の幽霊にはこちらの情報が筒抜けのようだ。リリヤといいトゥーレといい、幽霊は自分に用があるものなのだろうか。

頭を過ぎった考えがおかしくて鼻を鳴らす。

「……君は僕の名前を知っているんだな」

「ええ、まあ。セオドア・デ・ユラング様でしょう」

トゥーレの言葉を受けてなにも言えなくなった。あまり呼ばれることのないフルネームまで知っているとは予想外だった。

広がる動揺を隠すように視線を持ち上げると、トゥーレの顔に初めて年相応の笑顔が浮かんだ。

「セオドア様は落ち着いていらっしやいますね。さすがユラング家の人間です」

嫌みか皮肉だろうかと穿ってしまふ。アレックスは別としても基本的には人懐っこいリリヤが嫌がる相手だ、そんな相手に褒められ

ても全然嬉しくなかった。

喚くようなリリヤの声が耳をつく。

「とつと用を告げたらどうだ、私は本当はお前の顔を見たくないんだからなっ」

「はあ……」

疲れたように溜息をついてから、トゥーレは視線をゆつくりとこちらに向けてくる。深々とフードを被っているからか、左目だけしか見えなかった。却って不気味に映る。

「……セオドア様、貴方に仕えているメイド。アニーさんでしたっけ？」

「え」

緊張感に欠けたセオの声が部屋に響く。

トゥーレが幽霊である以上、なにを知っているもおかしくないと思っているが、それにしてもこのタイミングでアニーの名前が出るとは思っていなかった。警戒するのも忘れてセオは視線をトゥーレに合わせる。

「アニーだけど……それがどうかしたか？」

どこか啞然とした表情を浮かべて答えると、トゥーレはセオの反応に満足しているらしく、おかしそくに笑い 告げてきた。

「彼女、殺されるかもしれませんよ」

明日の天気について話すような口調の割に、受け流していい内容とは思えなかった。セオは心臓が跳ね上がりそうになるのを堪え、きつく手を握り締めながら裏返りそうになる声を抑えて返す。

「ア……アニーが、どうして？ 誰に？ 大丈夫なのか？」

「僕が見た限り大丈夫でしたよ。ただレイモンド様が今後どうされるかまでは……」

父の名前が出た時、ぎゅっと唇を噛み締めていた。

父は首都に出かけていると聞いたはずだが、なぜアニーと？ そしてなぜアニーが殺されかけている？

トゥーレは理由を知っていそうだが教えてはくれないだろう。か

といっただけでもわからない。

「レイモンド様はセオドア様が顔を見せれば、アニーさんの命を助けてもいいと言っていましたよ」

トウーレの口から言われた言葉に目眩がしてしまった。

父に会う？ この十年ろくに会ったことのない、自分を幽閉していた人間に？ 正直会いたくない。けれどアニーが殺されるのはもつと嫌だ。

血が出てしまうのではないかと言うほど唇を強く噛み締め、質問する。動揺していたので平凡なことを聞いてしまった。

「……それは僕一人ですか？」

セオが尋ねるとトウーレが頷くのが見えた。

「一人ででしょうね。しかも誰にも見つからないように行かなければ、城の兵士に普通に捕まるでしょう」

一度目を閉じる。そのあとゆっくり目を開いて振り返り、未だにトウーレを警戒しているリリヤに視線を向ける。リリヤはそれでセオの言いたいことを理解したらしく口を開く。

「……トウーレは凄く性格が悪いし、都合悪いと無視するけどな、嘘はつかないんだ。だから……」

リリヤはそれ以上なにも言わなかった。けれど続く言葉は嫌になるほど理解できた。

だからアニーのことは本当だろう、と。

「それと、セオドア様。……貴方がレイモンド様のところに行けば、アニーさんの命が助かるだけじゃないんですよ。貴方が長年幽閉されていたわけも分かるでしょう」

眉間に皺が生まれる。そしてトウーレの反応を窺おうと視線を向ける。

自分が十年も幽閉されていた理由。

今更そんな話出てこないと思っていた。知らないでいいとフラヴイに言ったが、動揺してしまった。

「ゆ、幽閉って、なんだよ」

セオが動揺したのを知ると、トゥーレは薄く笑みを浮かべる。

「僕の口からは止めておきますよ。ですがセオドア様が聞いたらそんなことで、と思うかもしれませんね」

どこか楽しそうなその笑みは薄気味悪い物を感じる。リリヤがこの少年を怖がるのも分かる気がした。

「そんなことで……？」

トゥーレの言っていることがいまいち分からない。権力争いでセオの幽閉が生じているなら、今更すぎて逆に言わないと思う。

「気になるのなら、北部にある城にまでどうぞ。城に入るのは……カタコンベ、カタコンベからの抜け道をお使いください。カタコンベと城の間に抜け道が存在しているのは知っていますよね？」

ぴくりと目を細める。反応せずには居られなかった。カタコンベと城とを繋ぐ道のことはよく覚えている。

なにせレティシアと 初めて好きになった人と通った、あの道だからだ。

3話了

(6) (後書き)

有り難うございました。 3話終わりました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3090w/>

ユユラングの春の月に安眠を

2011年12月21日16時47分発行